

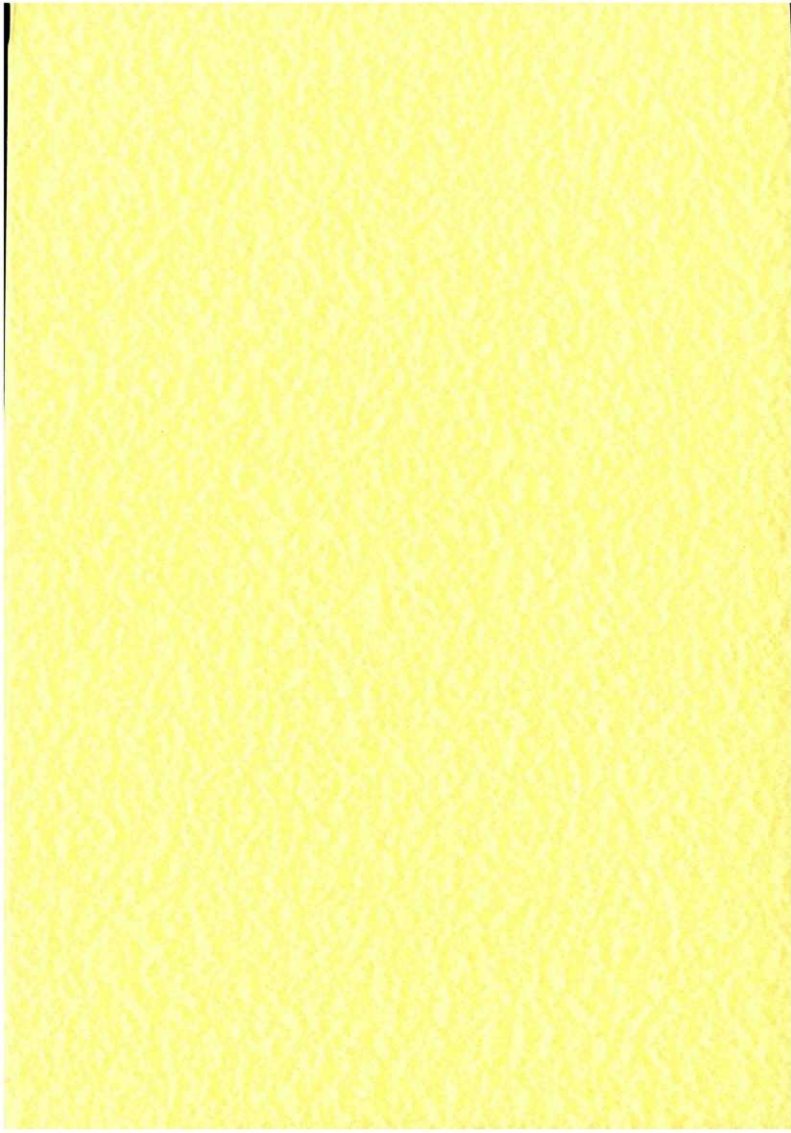
大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による日之出住宅建設にかかる発掘調査報告書

2010.3

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による日之出住宅建設にかかる発掘調査報告書

2010.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による日之出住宅建設にかかる発掘調査報告書

2010.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

このたび、東淀川区に位置する西淡路1丁目所在遺跡の報告書を上梓する運びとなった。本遺跡では初となる単行本としての刊行である。

当地周辺は近代以降急速にその姿を変えたが、かつては淀川の水系によって育まれた湿潤なデルタ地帯が広がっていた。今回の発掘調査では累積する耕作土や溜池、そして護岸遺構を検出し、かつての景観を彷彿させるとともに、本遺跡の南東に近接する崇禅寺遺跡、また西に位置する宮原遺跡を空間的、時間的につなぐ遺跡であることが明らかとなった。

こうした調査成果の中でも、淀川以北では市内初の出土例となる金箔押し瓦はとりわけ重要な発見である。この瓦が葺かれた施設を限定することはできなかったが、豊臣期における当地一帯の様相を考える上で重要な知見であることは間違いない。

当地の歴史を明らかにする上で考古学的な発掘調査は必須のものであり、今後の調査成果の蓄積が望まれる。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで種々のご尽力をいただいた大阪市都市整備局をはじめとする関係諸機関、ならびにご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

2010年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人 大阪市文化財協会が大阪市の委託を受け、2009年に東淀川区西淡路1丁目で実施した発掘調査（WA08-1次、WAは西淡路1丁目所在遺跡を示す略号）の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人 大阪市文化財協会 文化財研究部次長 南秀雄、難波宮調査事務所長（当時）趙哲済の指揮のもと、文化財研究部学芸員 市川創が担当した。
- 一、本書の執筆および編集は、南ならびに難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、主として市川が行った。ただし、自然科学的分析の結果について報告する第IV章については、文化財調査コンサルタント株式会社の報告文をもとに市川が編集した。また、第V章第1節については宮本佐知子が執筆した。本書の用事用語や体裁の調整は文化財研究部技術管理担当課長 田中清美のほか、高橋、文化財研究部事業企画担当課長代理 清水和明、同部事業担当係長 佐藤隆、同部学芸員 小倉徹也らの報告書校正委員が行った。
- 一、基準点測量は、アジア航測株式会社に委託した。
- 一、遺構写真は主として市川が撮影し、一部の撮影を阿南写真工房 阿南辰秀氏に委託した。遺物写真の撮影は、寿福写真 寿福滋氏に委託した。
- 一、珪藻・花粉・植物珪体分析については、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの援助を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 調査次数に冠せられるアルファベットについて、WAは西沢路1丁目所在遺跡、MHは宮原遺跡、SZは崇禪寺遺跡を示している。例えばWA08-1次という調査は、2008年度で1番目の西沢路1丁目所在遺跡の調査であることを示す。
2. 本書で用いた層序学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、溜池(SG)、土壕(SK)、畦畔(SR)の分類記号の後に、番号を付している。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。また、挿図中の示北記号は、図1は真北、それ以外は座標北を使用した。
5. 本書で用いた地層の土色および遺物の色調は、『標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。
6. 本書で用いた遺物の編年観や器形・器種分類は次の文献に拠っている。弥生土器：[杉本厚典1999b]、瓦器：[森島康雄1992]、瓦質土器：[佐藤隆1996]。
7. 本書で使用する中・近世の時期区分は以下の通りである。

中世前期：平安時代後期～鎌倉時代(1086～1333年)
中世後期：南北朝～戦国時代(1333～1580年)
豊臣前期：本願寺焼亡～大坂城三ノ丸築造開始(1580～1598年)
豊臣後期：大坂城三ノ丸築造～大坂夏ノ陣(1598～1615年)
徳川期：大坂夏ノ陣～大政奉還(1615～1867年)

本文目次

序文

例言

凡例

第I章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯と調査方法	1
1) 発掘調査に至る経緯	1
2) 発掘調査の方法	1
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	3
1) 発掘調査の経過	3
2) 報告書作成の経過	3
第II章 遺跡の地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境と既往の調査成果	6
第III章 調査の結果	11
第1節 層序	11
第2節 遺構と遺物	15
1) 第5A層上面の遺構	15
2) 第4層上面の遺構	15
3) 第3B層の遺構	19
4) 第2層の遺構と遺物	20
5) 各層出土の遺物	29
第IV章 自然科学的分析	31
第1節 分析の目的と分析試料	31
1) 分析の目的	31
2) 分析試料	31
第2節 花粉分析	32
1) 分析方法	32
2) 分析結果	33

第3節	植物珪酸体分析	41
1)	分析方法	41
2)	分析結果	41
第4節	珪藻分析	43
1)	分析方法	43
2)	分析結果	43
第5節	考察	49
1)	分析試料の堆積時期について	49
2)	耕作層について	49
3)	第5A層の変形要因について	50
4)	古環境	50
	i) 丘陵から山地の森林植生	ii) 調査地近辺の堆積環境
	iii) 調査地近辺の植生	
第V章	遺構と遺物の検討	51
第1節	西淡路1丁目所在遺跡出土の金箔押し瓦について	51
1)	大阪市内における金箔押し瓦の出土状況	51
2)	西淡路1丁目所在遺跡で金箔押し瓦が出土する意味	51
第2節	西淡路1丁目所在遺跡と周辺遺跡の動態	53
1)	古地形の概観	53
2)	各時期の動態	53
	i) 弥生時代末～古墳時代初頭	ii) 古墳時代中期
	iii) 奈良時代	iv) 平安時代～中世前期
	v) 中世後期～豊臣期	vi) 徳川期
第VI章	調査成果のまとめ	59
1)	中世前期以前	59
2)	中世後期	59
3)	豊臣期	59
4)	徳川期以降	59
引用・参考文献		61

索引

英文目次

原色図版目次

- 1 調査地遠景と金箔押し瓦
上：調査地遠景(北東から)
下：金箔押し瓦10(実物の75%)

図版目次

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 調査区全景および南東壁断面 | 5 SG201 |
| 上：調査区全景(第5B層上面、北西から) | 上：SG201断面(北北東から) |
| 下：調査区南壁(西北西から) | 中：護岸遺構(西から) |
| 2 地層断面 | 下：護岸遺構(北西から) |
| 上：調査区北壁(南西から) | 6 主要遺物 |
| 中：調査区東壁(北から) | 上：SG201第1次水成層出土遺物 |
| 下：深掘り地層断面(北西から) | 下：各層出土遺物 |
| 3 第4層上面の遺構 | 7 花粉化石 |
| 上：第4層上面全景(南西から) | 8 植物珪酸体 |
| 中：SR401~406(南西から) | 9 珪藻化石 |
| 下：SR405断面(北東北から) | |
| 4 第2層の遺構 | |
| 上：第2層上面全景(北西から) | |
| 中：鋤濤群検出状況(北西から) | |
| 下：地層観察畦断面(北西北から) | |

挿 図 目 次

図1 西浜路1丁目所在遺跡の位置……………	1	図25 SG201出土遺物(2)……………	26
図2 調査区と測量杭の配置……………	1	図26 SG201出土遺物(3)……………	27
図3 大阪市北部の地形分類図……………	5	図27 SE202遺構および出土遺物実測図……………	28
図4 周辺の道路と調査地……………	6	図28 各層出土の遺物実測図……………	29
図5 WA06-1次調査出土の古式土器……………	8	図29 試料採取位置……………	31
図6 崇禪寺遺跡で検出された古墳の痕跡……………	8	図30 花粉分析処理フロー……………	32
図7 WA07-1次調査井戸SE25および出土遺物……………	9	図31 東壁の花粉ダイアグラム……………	35
図8 大阪市北部と周辺の条里地割……………	9	図32 東壁の花粉含有量ダイアグラム……………	35
図9 MH94-2次調査第2面の遺構……………	9	図33 深掘りNo.1地点の花粉ダイアグラム……………	37
図10 淀川右岸地域出土の韓式瓦器……………	10	図34 深掘りNo.1地点の花粉含有量ダイアグラム……………	37
図11 崇禪寺南方の中世後期大溝……………	10	図35 深掘りNo.2地点の花粉ダイアグラム……………	39
図12 地層と遺構の関係……………	11	図36 深掘りNo.2地点の花粉含有量ダイアグラム……………	39
図13 調査区南壁地層断面図……………	12	図37 植物珪酸体分析処理フロー……………	41
図14 調査区東壁地層断面図……………	13	図38 東壁の植物珪酸体ダイアグラム……………	42
図15 第5A層上面の遺構平面図……………	16	図39 珪酸分析フロー……………	43
図16 第5A層上面検出遺構の平・断面図……………	17	図40 東壁の珪酸ダイアグラム……………	44
図17 第4層上面の遺構平面図……………	18	図41 東壁の珪酸総合ダイアグラム……………	44
図18 SR401・404断面図……………	19	図42 深掘りNo.1地点の珪酸ダイアグラム……………	46
図19 第3B層の遺構平面図……………	20	図43 深掘りNo.1地点の珪酸総合ダイアグラム……………	46
図20 第3B層検出遺構の平・断面図……………	21	図44 深掘りNo.2地点の珪酸ダイアグラム……………	47
図21 第2層の遺構平面図……………	22	図45 深掘りNo.2地点の珪酸総合ダイアグラム……………	47
図22 SG201断面図……………	23	図46 豊臣期における金箔押し瓦出土地点……………	52
図23 SG201護岸遺構実測図……………	24	図47 周辺調査区の柱状図対比……………	54
図24 SG201出土遺物(1)……………	25	図48 周辺遺跡における遺構の変遷……………	55

表 目 次

表1 周辺調査一覧……………	7	表8 深掘りNo.2花粉組成表……………	40
表2 WA08-1次調査地の層序……………	11	表9 検出植物珪酸体組成表……………	41
表3 分析試料の採取位置、層序および数量……………	31	表10 同定・検鏡対象分類群……………	42
表4 微化石調査結果……………	32	表11 東壁の珪酸組成表……………	45
表5 検出された花粉の種類一覧表……………	34	表12 深掘りNo.1地点の珪酸組成表……………	48
表6 東壁花粉組成表……………	36	表13 深掘りNo.2地点の珪酸組成表……………	48
表7 深掘りNo.1地点の花粉組成表……………	38		

写 真 目 次

写真1 人力掘削および記録作業……………	2	写真2 写真測量の実施状況……………	2
----------------------	---	--------------------	---

第Ⅰ章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯と調査方法

1) 発掘調査に至る経緯

西淡路1丁目所在遺跡は、古墳時代から徳川期にかけての複合遺跡である。大阪市東淀川区の西部、新大阪駅の北側に位置しており、南には淀川、北には神崎川が流れる。

このたび大阪市都市整備局によって、日之出住宅の建設工事が行われることとなった。これを受けて、周辺での調査状況に基づいて大阪市教育委員会が発掘調査が必要であるとの見解を示し、発掘調査を実施した。発掘調査の実施および報告書の作成は、大阪市都市整備局の委託を受け財団法人大阪市文化財協会がこれを行った。

2) 発掘調査の方法

発掘調査は、建設工事が予定されている範囲を対象として行った(図2)。

掘削の方法は、近・現代の表土・作土については重機を用いて行い、徳川期以下の地層については人力に拠った。

重機による掘削にはバックホーを使用し、表土を除去した後、第1層(第Ⅲ章第1節参照)を対象として行った。その掘削深度は地表面から約1mである。掘削に際しては、壁面が崩落しないよう十分な傾斜を確保しつつ法面を整形した。

人力による掘削に際しては、地層の掘下げ作業では遺物の出土に注意しつつ大スコップなどを使用した。遺構の検出が予想される面に至ったのちは、園芸用両刃鎌などを使用して検出面を精査し、遺構・遺物の検出に努めた。検出された遺構は移



図1 西淡路1丁目所在遺跡の位置
([市原実1993]に一部加筆)

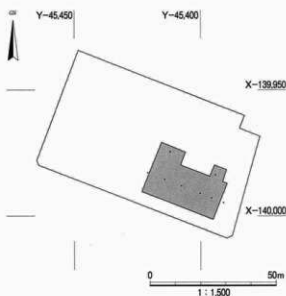


図2 調査区と測量杭の配置

植コテなどを使用して注意深く掘削し、遺構ごとに遺物を取上げた。

発見された遺構・遺物および堆積層の断面については、写真撮影や平面・断面実測図の作成を適宜行い、記録した。実測図は、平面図では50分の1ないし20分の1、断面図は20分の1ないし10分の1の縮尺で作成した。特に重要な遺構検出面に対しては、専門の測量業者に委託し写真測量によるデジタルデータ化を依頼した。

図根点は世界測地系に則った基準点測量によって設置し、測量用の基準点は現場の状況に即して適宜に打設した。現場での遺構の写真撮影は担当調査員が行ったが、特に重要な遺構などについては専門のカメラマンに撮影を委託した。



写真1 人力掘削および記録作業



写真2 写真測量の実施状況

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

1) 発掘調査の経過

今回の調査面積は540㎡である。2008(平成20)年12月24日からパネルゲート設置などの準備工事を開始し、同月26日に終了した。

2009(平成21)年1月5日からは、後述する第1層までを対象として重機による掘削を行った。

1月7日以降は第2層以下を対象として人力による掘削を行い、遺構検出・写真撮影・作図などを適宜行った。途中、1月28日には基準点測量、2月19日には航空測量、2月21日にはカメラマンによる遺構撮影を行った。

これらの作業を終え、2月23日からは重機による埋戻しを行い、3月4日には現地における作業をすべて終了した。

2) 報告書作成の経過

発掘調査で出土した遺物については、すべて大阪市文化財協会難波宮調査事務所に持ち帰り、洗浄作業などを行った。これら洗浄・注記・接合などの遺物整理作業については9月初旬に終了した。遺物の実測作業および遺構・地層などに係る製図作業・写真図版の作成作業には適宜パーソナルコンピュータを使用し、7～10月に行った。遺物の写真撮影は専門のカメラマンに委託し、10月下旬に実施した。

これらの作業と並行して、9月から11月にかけて珪藻・花粉・植物珪酸体分析を専門業者に委託して実施した。

報告書の下稿作成・編集作業は2009(平成21)年9月から翌2010(平成22)年1月にかけて断続的に行った。これらの作業を経て完成した報告書のデジタルデータ(フィルムなど一部非デジタルの媒体を含む)を、2月より外部業者に委託して印刷・製本し、2010(平成22)年3月19日に完成した。

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

西淡路1丁目所在遺跡は淀川右岸の大阪市東淀川区の西部に位置し、同川が形成したデルタ地帯に立地している(図3)。現況では直径約300mの範囲が遺跡として指定されており、本遺跡の東には弥生時代末～古墳時代の成果が目される崇禪寺遺跡があり、西には平安時代～中世後期の集落・農業生産遺構が検出されている宮原遺跡がある。

これら3遺跡の現状の地表面標高を見ると、崇禪寺遺跡東端でTP+2.6m程度、西淡路1丁目所在遺跡付近でTP+1.3m程度、宮原遺跡西端でTP+1.0m程度と東ほど高く、崇禪寺遺跡付近が微高地を形成している。この微高地の成因については、大阪湾岸流で形成された「長柄砂州」の一部とする見解があったが[梶山彦太郎・市原実1986]、近年では淀川の沖積作用をより大きく評価する見解が提出されている[趙哲済2005]。周辺の発掘調査における河川堆積層の観察からは、おおむね東→西、あるいは北→南の古流向が復元でき、淀川の沖積作用を重視する後者の見解がより蓋然性が高いといえる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c・2009]。

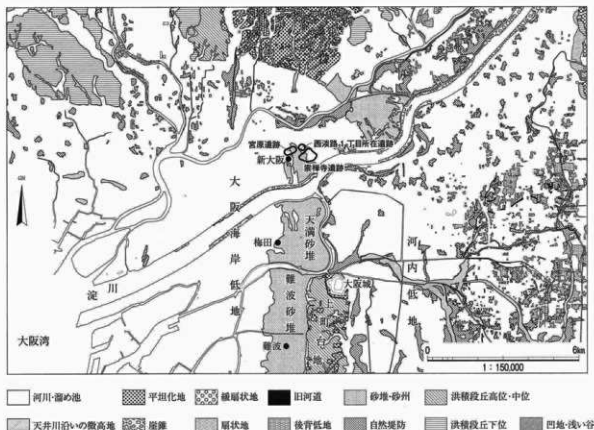


図3 大阪市北部の地形分類図(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

第2節 歴史的環境と既往の調査成果

本遺跡および近接する崇禪寺遺跡、宮原遺跡における歴史的環境、および既往の調査成果についてみていきたい。なお崇禪寺遺跡についてはすでに3冊の調査報告書が刊行されており[大阪市文化財協会1999、大阪府教育委員会1982・2003]、同遺跡の詳細についてはそれらを参照されたい。また、図4および表1には当地域における調査の一覧を示した。

この地域で最初に人間活動の痕跡が認められるのは、弥生時代後期末(庄内期)の崇禪寺遺跡においてである。崇禪寺遺跡一帯は、前節で見たように現状地形でも周辺よりやや高く、また第V章第2節で後述するように、該期の生活面でもほかより高い地形に位置していたと考えられる。したがって、当地の地形形成の主要因が淀川の営力であるという近年の知見に基づけば、同川の堆積作用により形成された微高地上が、まず生活の場として選ばれている。以後、崇禪寺遺跡は布留式期Ⅰの段階まで盛行するが、布留式期Ⅱの時期にはいったん途絶える。この時期の崇禪寺遺跡の性格については、他地域産(系)土器の存在や鉄製素環頭大刀の出土から、水上交通や軍事上の拠点であったと評価されることが多い[積山洋1994ほか]。また、外來系土器を多く含む特徴的な土器群を対象として、その評価および編年的研究も行われているほか[杉本厚典1999a・b]、出土した貝類を対象として考察が行われるなど[池田研1999]、遺跡の特性に即した多様な検討が行われている。

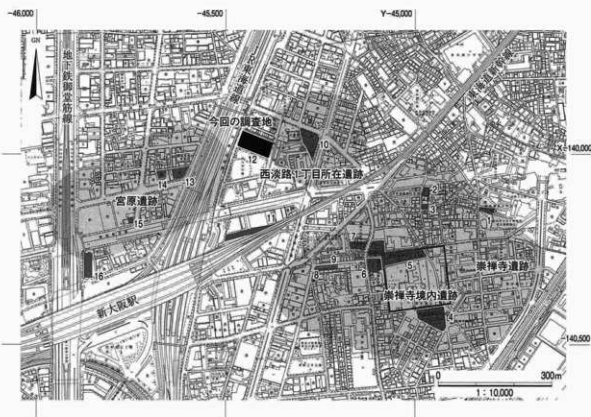


図4 周辺の遺跡と調査地

表1 周辺調査一覧

遺跡名	番号	調査回数	調査期間	面積 (㎡)	担当者	報告書	調査成果の概要
崇禪寺遺跡・ 崇禪寺境内遺跡	1	SZ98-1	1998.46～ 4.23	71	杉本厚典	大文協 2001b	・弥生時代末～古墳時代の古備系土器 出土 ・15世紀後半の溝を検出
	2	SZ88-2	1988.64～ 6.10	70	藤田幸夫	大文協 1999	・中世前期から徳川期にかけての遺物 が出土
	3	SZ88-4	1988.8.1～8.6	97	藤田幸夫	大文協 1999	・弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・ 遺物を検出 ・中世についても遺構・遺物あり
	4	府教委調 査	2001.6～ 2002.8	1,060	阪田育功・ 辻本 武	府教委 2003	・「崇禪寺古墳」の検出 ・崇禪寺周囲の区画溝を検出
	5	府教委調 査	1981.5.22～ 8.7	740	大野 薫	府教委 1982	・弥生時代末～古墳時代前期の土器が 多量出土。 ・鉄製素環頭大刀が出土。
	6	SZ89-6	1989.9.27～ 10.17	280	藤田幸夫	大文協 1999	・弥生時代後期～古墳時代初頭の土器 が多く出土 ・上記土器群には外系系土器を含む
	7	SZ89-13	1990.1.24～ 2.10	330	藤田幸夫	大文協・ 市教委 1991	・弥生時代後期～古墳時代初頭の土器 が多く出土
	8	SZ01-4	2001.12.3～ 12.9	60	南 秀雄・ 趙 哲済・ 櫻井久之	大文協・ 市教委 2003a	・古墳時代前期の遺物が多く出土
	9	SZ02-1	2002.12.9～ 12.10	20	池田 研	大文協・ 市教委 2004	・弥生時代後期～古墳時代前期の土器 のほか、該期と思われる遺構を検出 ・古墳時代中～後期の円筒埴輪が出土
西波路1丁目 所在遺跡	10	WA06-1	2006.7.28～ 8.5	90	趙 哲済	大文協・ 市教委 2008c	・古墳時代前期～中世の遺構を検出
	11	WA07-1	2007.4.2～ 4.26	450	高橋 工	大文協・ 市教委 2009	・奈良時代～中世の遺構を検出
	12	WA08-1	2008.12.24～ 2009.3.14	540	市川 創	本書	・金箔瓦の出土 ・中世後期以降、耕作地となる
宮原遺跡	13	MH99-3	2000.1.6～1.7	52	黒田慶一	大文協・ 市教委 2001	・円筒埴輪のほか、古代の遺物が出土
	14	MH06-2	2007.2.5～ 2.14	78	岡村勝行	大文協・ 市教委 2008b	・中世前期を中心とする遺構・遺物を 検出
	15	MH06-1	2007.1.15～ 1.18	34	岡村勝行	大文協・ 市教委 2008a	・遺構は不明瞭ながら、中世の遺物が 出土
	16	MH94-2	1995.1.17～ 2.8	200	松本啓子	大文協・ 市教委 1996	・中世の遺構を検出、「宮原庄」に関係 するか

※1：番号は図4中に示したものと対応している。

※2：報告書発行者については、財団法人大阪市文化財協会を「大文協」、
大阪市教育委員会を「市教委」、大阪府教育委員会を「府教委」とそれぞれ略記している。

同時期の西波路1丁目所在遺跡および宮原遺跡を見ると、WA06-1次調査において遺物が出土している(図5)、検出層準は河川堆積層であり、崇禪寺遺跡以西がまだ完全には陸化していなかったことがわかる。

こうした地形的環境は古墳時代中期に至っても大きな変化をみせなかったようで、前期後半の途絶期を挟み、古墳時代中期の中心もやはり崇禪寺遺跡にある。同遺跡近辺に古墳が存在したであろうことは、近隣から出土する埴輪などからかねてより推測されてきたところであったが[大阪市文化財協



図5 WA06-1次調査出土の古式土師器
(図4-調査地10)

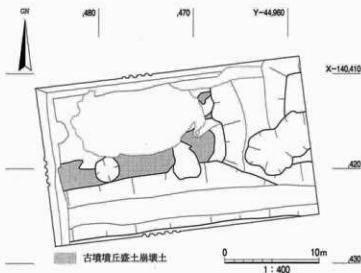


図6 崇禅寺遺跡で検出された古墳の痕跡
〔大阪府教育委員会2003〕より転載、調査地4)

会1999など]、現在の崇禅寺南側で実施された調査で古墳墳丘の崩壊土と考えられる地層とともに多数の埴輪が検出され(図6)、残片的ながらその存在が確かめられている[大阪府教育委員会2003]。

その後、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては目立った遺構・遺物は認められない。この地域で再び人間活動が認められるのは、奈良時代のことである。この時期に至り西淡路1丁目周辺はようやく安定したようで、WA07-1次調査において井戸などが検出されている(図7)。現状ではこの井戸を除き古代における目立った知見は得られていないが、地籍図や航空写真などをもとに条里地割を復元し(図8)、これが中世以前に遡るとする指摘があることに留意しておく必要がある[服部昌之1988]。

その後、中世前期になると宮原遺跡を中心に遺構の形成が進む。この時期の宮原一帯には「宮原庄」が存在し、奈良西大寺をはじめとする権門寺社の所領が入組んで存在したようである[平凡社地方資料センター編1986]。この時期の遺構としてはMH94-2次で建物・橋などが重複して検出されているほか(図9)、西淡路1丁目所在遺跡においてもWA07-1次でこの時期の遺構が検出されており、文献史料に見える宮原庄の具体相を示している可能性がある。また瓦器碗の産地組成について、淀川以南の大阪市域ではほぼすべてが和泉型の製品で占められるのに対し、当地周辺では樟葉型瓦器碗が少量ながら出土する(図10)。中世前期において淀川を挟んでやや異なった流通体系が存在した可能性があり、興味深い。

南北朝期に入る頃には、宮原庄には春日社・興福寺の支配力が増し、あるいは宮原北庄と南庄に区分されながら存続している。また南北朝期の動乱の中で武士勢力の侵略、これに対する農民層の抵抗が激化し、そうした拮抗の記録が残っている。その後、1442(嘉吉2)年には崇禅寺が建立されており、寺領を集積していく。ただし1573～1592年の天正年間には、戦乱の兵火により諸堂宇が消失したと

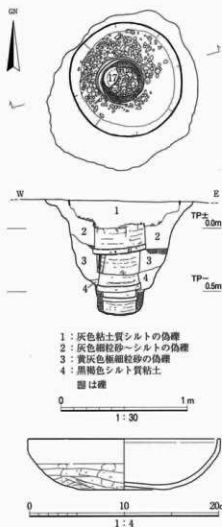


図7 WA07-1次調査井戸SE25および出土遺物
 (調査地11)

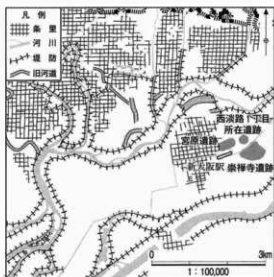


図8 大阪市北部と周辺の条里地割
 (〔服部昌之1988〕所収図を一部改変・追加してトレス)

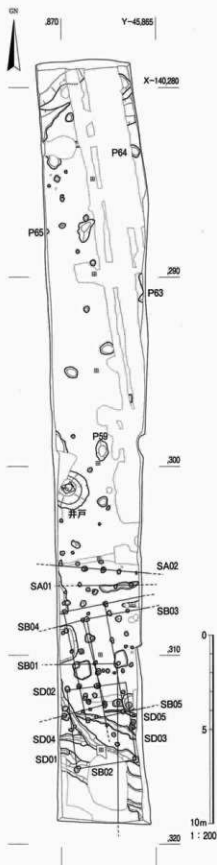


図9 MH94-2次調査第2面の遺構(調査地16)

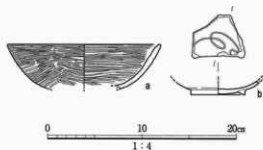


図10 淀川右岸地域出土の樟葉型瓦器碗

a: MH06-2次, b: HM97-1次

いう。こうした状況を反映して、中世後期には崇禪寺遺跡で再び人間活動の痕跡を認めることができる。この時期の崇禪寺に係わる遺構として、大阪府教育委員会調査地における二重の大溝の検出がある。溝の斜面部には柵跡と目される柱穴が検出されており(図11)、崇禪寺域を画する防衛的施設である可能性がある[大阪府教育委員会2003]。

また徳川期においては、淀川による度重なる洪水があったことが記録に残っており、その対策として淀川から神崎川への排水を企図して逆川が掘削されたこと、しかしながら功を奏さずむしろ洪水が頻発したことなどが伝わっている。

このように、当地における人間活動は自然の営為、なかんずく淀川の水流通と密接に関係しながら推移したものと評価できる。そして、こうした淀川の沖積作用による陸地化と人間活動の相関を考える上で、当地における考古学的調査が重要な役割を果たしている。

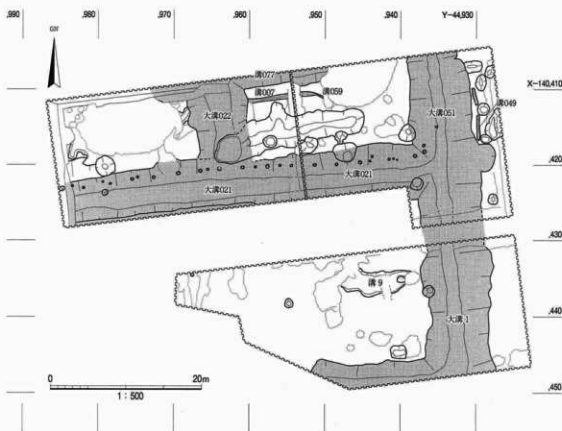


図11 崇禪寺南方の中世後期大溝

([大阪府教育委員会2003]所収図をトレースして転載、調査地4)

第三章 調査の結果

第1節 層序

層厚88～112cmの現代盛土層(第0層)の下位にある地表下約3mまでの地層を、第1～5層に区分した(図版1・2、図12～14、表2)。

第1層：第1A・Bの2層に細分できた。第1A層は黒褐色(2.5Y3/2)を基本の色調とするシルト質砂層で、層厚は最大で20cmである。ガラス片などが出土した。本層上面では溝、下面では鋤溝を検出した。第0層の盛土が行われる直前まで機能した現代の水田層である。第1B層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)を呈する細粒～中粒砂層で、層厚は最大でも10cmであり、第1A層によって激しく削剥されていた。近～現代の水田作土である。



図12 地層と遺構の関係

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)を呈する礫質細粒砂からなり、層厚は約16cmである。下部には中粒～粗粒砂からなるレンズ状の礫層が観察できたが、その分布は調査区南東部に限られた。上面ではSE202、下面ではSG201、鋤溝を検出した。本層の時期を示す遺物として土師質土器・軟質施軸陶器・肥前陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器が出土し、そのほかに土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・青花・瓦が含まれていた。

第3層：第3A・Bの2層に細分できた。両層とも瓦質土器などが出土し、中世後期の地層である。第

表2 WA08-1次調査地の層序

層序	おもな岩相	層厚(cm)	おもな遺構	おもな遺物	時代
0	—	88～112	—	—	現代
1	A 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂	≤20	↑溝 ↓鋤溝	ガラス片など	現代
	B オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒～中粒砂	≤10	—	—	近～現代
2	オリーブ褐色(2.5Y4/4)礫質細粒砂	約16	↑井戸 ↓溜池・鋤溝	陶磁器	豊臣～徳川期
3	A にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒～中粒砂	14～24	—	瓦質土器	中世後期
	B 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト	6～12	↑畦畔・土壌 ↓土壌	瓦質土器	中世後期
4	A 褐色(10YR4/6)砂質シルト	4～18	↑畦畔	瓦質土器	中世後期
	B 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト	≤10	—	瓦質土器	中世後期
	C 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルト	≤16	—	瓦質土器	中世後期
5	A 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒～中粒砂・暗灰黄色(2.5Y4/2)含植物遺体シルト質粘土～シルト質細粒砂	4～16	↑土壌、溝	—	—
	B オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂とシルト層の互層	≥100	—	—	—

↑：上面検出遺構 ←：地層内検出遺構 ↓：下面検出遺構

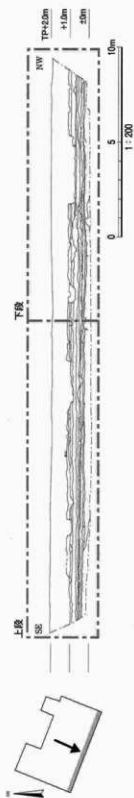
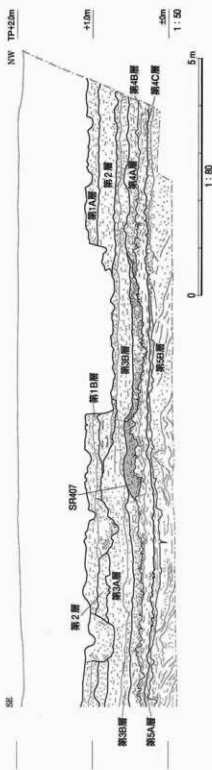
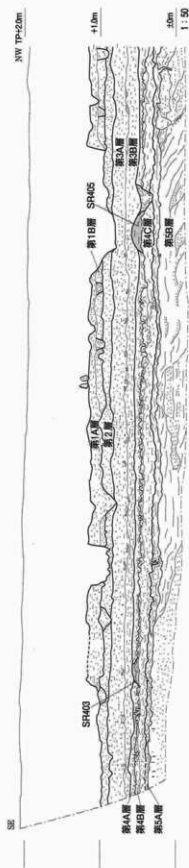


图13 调查区南麓地质断面图

3A層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するシルト質細粒～中粒砂からなる作土で、層厚は14～24cmである。本層からは瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・中国製青磁・中国製白磁・中世陶器のほか、これよりも遡る時期の遺物として土師器・須恵器・瓦器が出土した。また、帰属時期は特定できないが、瓦、石製品の一部と思われる粘板岩も出土している。第3B層との層界付近には粗粒砂からなるレンズ状の偽礫が散在した。また、鉄分が多く沈着し、上部では特に顕著であった。第3B層は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する砂質シルトからなる。上面ではSR3B06、下面ではSK3B01～3B05を検出した。本層からは瓦質土器・中世陶器・中国製青磁・中国製白磁などが出土した。またこれよりも遡る時期の遺物として弥生時代後期の土器・土師器、東播系を含む須恵器・瓦器・黒色土器・緑釉陶器が出土したほか、時期不詳ながら釘と思われる鉄器などが出土している。

第4層：第4A・B・Cの3層に細分できた。各層準とも瓦質土器をはじめとする遺物が出土しており、第3層と同様に中世後期の地層である。第4A層は褐色(10YR4/6)を呈し、分級の悪い砂質シルトからなる作土で、層厚は4～18cmである。上面は第3B層により削剥されている。また、上部には鉄分が沈着していた。本層上面ではSR401などを検出した。本層からは、瓦質土器、中世陶器のほか、弥生時代後期の土器・土師器・須恵器・瓦器・中国製青磁・白磁が出土した。また、緑色片岩なども出土している。第4B層は暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する水成の粘土質シルトからなる。第4A層によって削剥され、層厚は10cm以下と薄い。第4C層は黒褐色(2.5Y3/2)を呈する細粒砂質シルトからなる。第4B層と比較してやや粗粒であり、かつやや暗色を呈する。調査区の西側ほど厚く堆積しており、最大で層厚16cmを測る。東へ向うにつれ第4B層と収斂して層厚を減じ、調査区の東端では第4B層と分層できなかった。第4B・C層からは、瓦質土器、中国製白磁のほか、土師器・須恵器・瓦器・瓦のほか、被熱した石製品、石材が出土している。

第5層：第5A・Bの2層に細分でき、このうち第5A層の層厚は4～16cmである。本層以下で遺物は出土しなかった。第5A層上面の標高は10cmほど南東側が高く、相対的に高所である南東部では、灰黄褐色(10YR4/2)を呈するシルト質細粒～中粒砂からなる。西北部へ向うにつれ、標高を減じるとともに細粒化し、調査区西端では暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する含植物遺体シルト質粘土～シルト質細粒砂である。なお東南部では一部に地層を攪拌した痕跡が認められ、あるいは人為が加わっている可能性がある。第5B層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈する細粒砂とシルト層の互層で、河成層である。層厚は100cm以上である。フォアセット・ラミナの堆積方向から、おおむね北東→南南西方向の流向が復元できた。

なお第四章に詳述するが、耕作の可能性を裏付けることを目的として第4層を対象とした自然科学的分析を実施したほか、堆積環境を推定することを目的として第5層についても同様に自然科学的分析を実施した。

第2節 遺構と遺物

第2層から第5B層上面に至る計7面について、平面的に遺構検出を行った。このうち第5A層下面では遺構が認められず、また第2層上面では近～現代の耕作に係わる遺構以外検出できなかった。よって、以下ではこの2面を除く第5A層上面、第4A層上面、第3B層上面、第2層下面、第2層上面の計5面について、下位の層準から順に遺構および出土遺物について報告する。

1) 第5A層上面の遺構(図15・16)

第5A層の上面で、土壌SK501およびこれに取付く溝状の遺構SD502、不定形な土壌SK503、小規模な土壌SK504・505を検出した。いずれの遺構からも遺物は出土しておらず、時期は明確にしがたい。

SK501 調査区の東部で検出した。隅丸の長方形を呈し、長辺5.80m、短辺1.48m、検出面からの深さは0.32mを測る(図16)。遺構の方向は西で北へ振っている。埋土は、最下部にシルト・中粒砂の偽礫からなる加工時形成層(図16断面図③層/基本層序との混同を避けるため、断面図の地層番号について本文中では丸付数字で表記する。以下同じ。)があり、その後、①・②層によって埋められている。埋土から遺物は出土しなかった。

SD502 SK501に取付く溝状の遺構である。長さ0.21m、幅0.68m、検出面からの深さは0.32mある。埋土は二分で、下半はシルト質砂の偽礫(図16-②層)、上半はシルト質中粒砂(同①層)である。

SK503 調査区の西部で検出した不定形な土壌である。全体としては東西2.40m、南北1.16mの規模があり、検出面からの深さは0.28mであった。埋土はいずれもシルトおよび砂の偽礫からなる人為的な埋戻し土であり、下半(図16-②層)の方が砂の割合が多かった。

SK504 調査区の東部で検出した小規模な土壌である。直径0.24m、検出面からの深さは0.16mである。埋土はシルト質砂であった。

SK505 調査区の南東部で検出した小規模な土壌である。直径0.30m、検出面からの深さは0.14mである。埋土はシルト質砂であった。

2) 第4層上面の遺構(図版3、図17・18)

調査区の南部および東部において、水田畦畔と考えられる高まりSR401～407を検出した。このうちSR401・406の2条は東西方向に延び、SR402～405・407の5条は南北に延びる。第4層からは図28に示すように中世後期の遺物が出土しており、該期の遺構である。なお第IV章で詳述するように、水田床土であることを検証するために第4B～C層を対象として花粉・植物珪酸体・珪藻の各自然科学分析を実施し、おおむねこの推定と整合的な結果が得られている。

SR401～405 5条の畦畔状遺構SR401～405は接続し、あるいは標高や方向を同じくしており、一連の畦畔と考えられる。したがって、SR401～405が構成する水田面としては6筆分を検出したことになる。対応する作土層と目される第4A層の上面で水田面の標高を計測すると、南北方向はほぼ

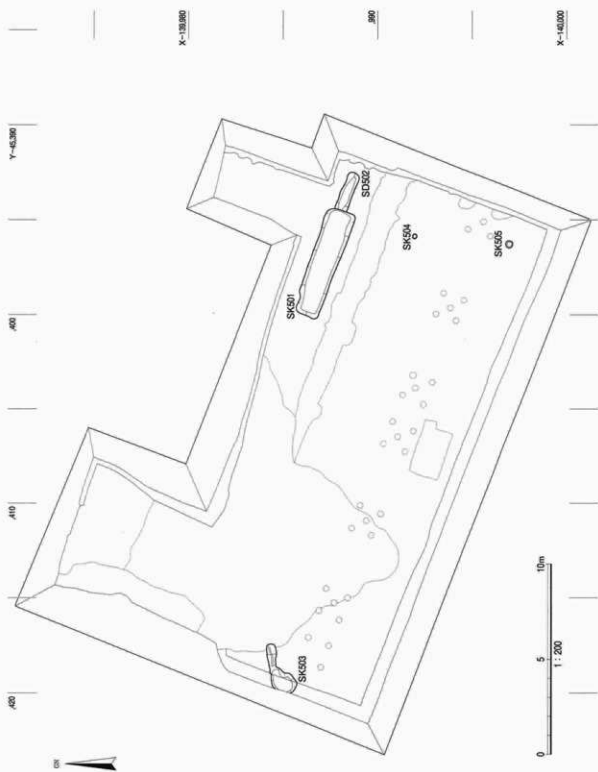


図15 第5A跡上面の遺構平面図

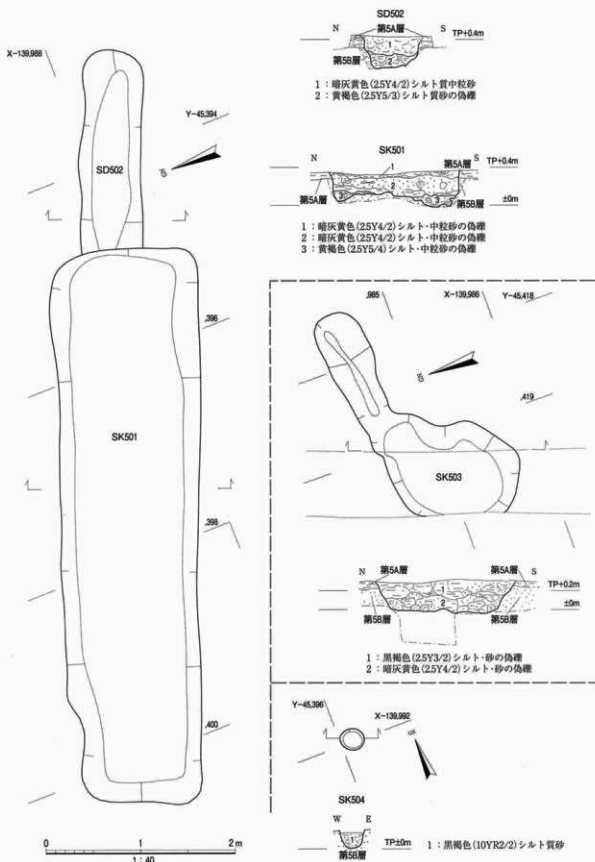


図16 第5A層上面検出遺構の平・断面図

第三章 調査の結果

同じで、東西方向では西が0.1m低い。また、SR406・407を含め、いずれも水成層である第4B・C層を削出して成形されていた(図18)。作土と考えられる第4A層は攪拌されており、また第4B・C層がシルトを基調とする細粒な堆積物で構成されるのに対して、細粒～中粒砂などやや粗い堆積物を含む。また、第4B・C層との層界は明瞭であり、上面は作土である第3B層によって削剥されていた。

SR401は調査区南部を東西に延びる畦畔状の高まりである。下幅0.50～1.10mで、高さは最大で0.16mである。総長約20mを検出し、東側は調査区外に延び、西側は後述するSG201によって失われている。そのため、西に位置するSR407との関係は不明である。南北の方向に延びるSR402～405は下幅0.65～1.60mと、やや広い部分がある。一方、最大高は0.12mと、SR401よりもやや低い。

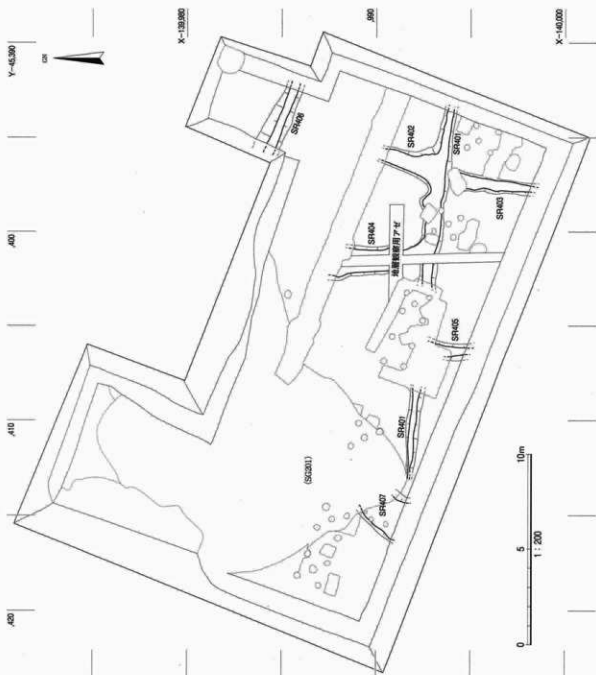


図17 第4層上面の遺構平面図

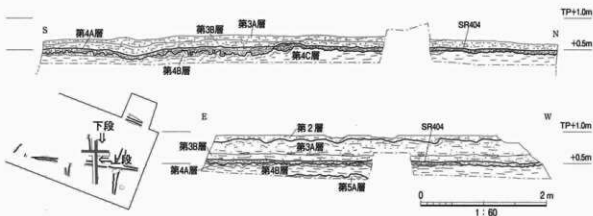


図18 SR401・404断面図

SR402・404は4mほど北に延びた後に現代の攪乱で切れ、以北には連続しない。SR403・405は調査区外に延びる。

SR406 調査区北東部で、長さ3.20m分を検出した。東西ともに調査区外に延びる。下幅は1.25mで、高さは最大で0.32mと他の畦畔に比べ高く残っていた。

SR407 調査区南東部に位置し、長さ1.80m分を検出した。北はSG201に切れ、南は調査区外へと延びる。下幅は2.38mで、高さは最大で0.14mと調査区の他の畦畔よりも幅が広く、SR401～405の西を画する大畦畔である可能性もあるが、攪乱により両者の接続関係は明確でない。

3) 第3B層の遺構(図19・20)

調査区の南半においてSK3B01～05、調査区の北東部においてSR3B06を検出した。このうちSK3B02およびSR3B06は第3B層上面で、それ以外の遺構は第3B層下面でそれぞれ検出した。また第3B層下面の遺構検出作業は、第4層上面のそれと同時に行った。各遺構からは中世前期の遺物も出土しているが、第3B層から中世後期の遺物が出土しており(図28)、該期の遺構群である。

SK3B01 調査区南東端で検出した小規模な土壌である。直径0.32m、検出面からの深さは0.16mである。埋土は砂質シルト(図20-②層)と、含炭砂質シルト(同①層)に二分できた。埋土からは瓦が出土した。

SK3B02 調査区中央付近で検出した土壌である。直径1.12m、検出面からの深さは0.08mを測るが、遺構の西半は後述するSG201によって失われていた。埋土はシルトの偽礫を含むシルト質砂で、遺構の底面には木質が残存していた。埋土からは土師器が出土した。

SK3B03 調査区の南東部で検出した土壌である。長径0.86m、短径0.68mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.08mである。埋土は砂質シルトで、東播系須恵器のほか、土師器が出土した。

SK3B04 調査区の南東部で検出した土壌である。直径0.80mを測る。検出面からの深さは0.08mであり、砂質シルトで埋る。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

SK3B05 調査区の南東部で検出した土壌である。いびつな長方形を呈し、長辺は1.44m、短辺は0.68m、検出面からの深さは0.07mを測る。埋土は砂質シルトで、土師器、瓦器が出土した。

SR3B06 調査区の北東部で検出した畦畔であり、第3B層を盛上げ、先述したSR406のやや北側に

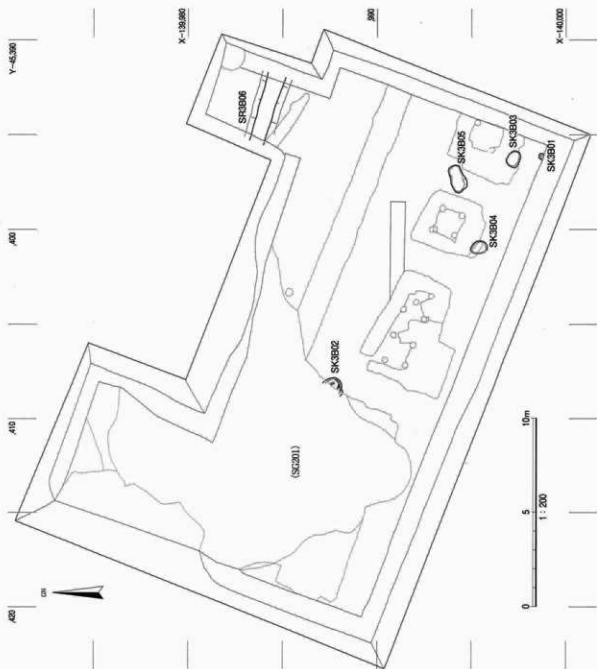


図19 第3B層の遺構平面図

設けられている(図14)。方向はSR406とほぼ同じで、西でやや北に振る。東西3.20m以上あり、下幅は1.50mある。

4) 第2層の遺構と遺物(図版4～6、図21～27)

第2層に係わる遺構として、同層下面ではSG201および鋤溝群、同層上面では井戸SE202を検出した。このうち第2層下面と上面の遺構検出は作業工程としては別途行ったが、報告の便宜上、同一項内で記述する。

SG201 調査区の西部で検出した溜池である。西で南に振るいびつな長方形形状を呈する。北西北ー南東南方向で17mほど、南西西ー北東東方向で16m以上の規模がある。埋土を見ると、最下部には水

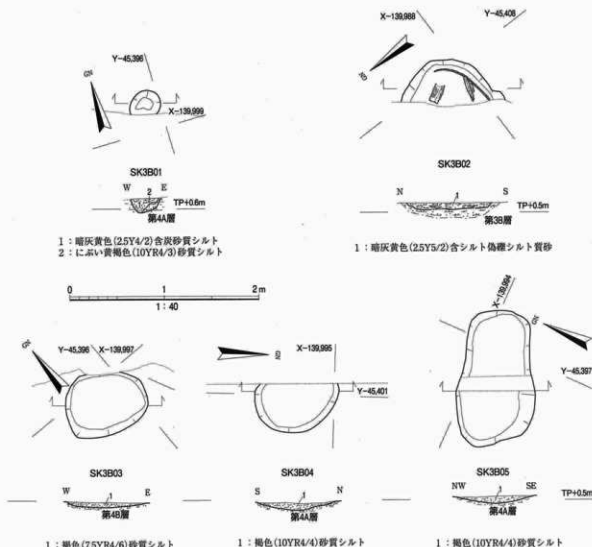


図20 第3B層検出遺構の平・断面図

成のシルトおよび砂層(図22-A・B断面①層、C断面③～⑤層、D断面⑩～⑫層/以下、第1次水成層と呼称する)があって地形を下刻している。A・B・D断面におけるラミナの観察から、この時の水流は大きくは東から西へと向うものであり、また断面Cでフォアセット・ラミナが観察できることから、時には北から南へ強い流れが押寄せ、南岸を大きく抉ったものと判断できる。その後、ある段階で護岸のための盛土が行われている(同A・B断面⑨・⑩層、C断面②層、D断面⑥・⑦層)。この盛土を行うに際してはその堅牢性を高めるため、木材による土留めが行われていた。その基本的な構造は、杭を打込み、杭間に板を渡すというものである(図版5、図23)。その後は、盛土が水によって侵食され池内に流入しながら(同A・B断面⑩層、D断面⑧層)、水漬きのシルト質砂で徐々に埋没する(同A・B断面⑥～⑧層、D断面③～⑤層/第2次水成層)。この時の埋土に水成の砂層を挟むことから、時には近隣の河川からオーバーフローした水が流入していたと推測できる。また護岸の為に行われた盛土の周辺部は、第2層の時期には耕地として利用された(同C・D断面①層)。そして最終的には埋立てられ(同A・B断面④～⑤層、D断面②層)、第1層の時期には調査区全面が水田として利用されるに至った(同A・B断面①～③層)。

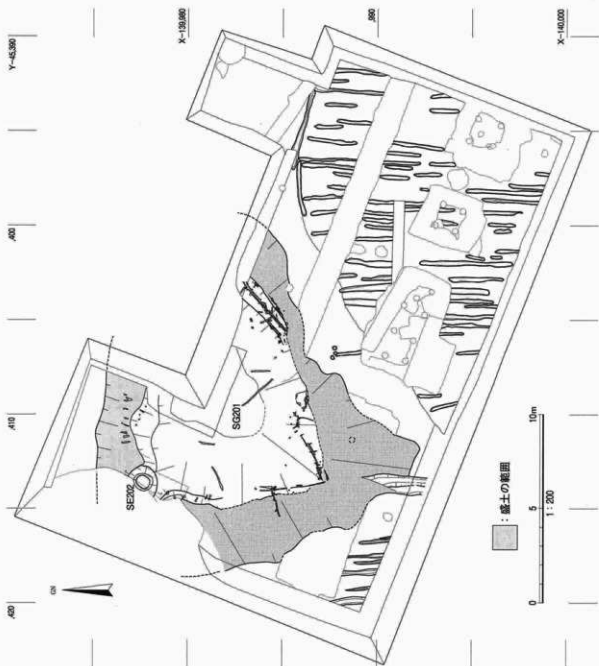


図21 第2層の遺構平面図

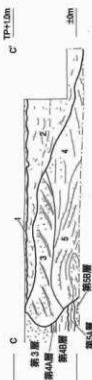
次に、SG201から出土した遺物について見る。第1次水成層からは、土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中世陶器、瓦、中国製青磁・白磁・青花などが出土し、このうち図24に示す遺物を図化した。

1は須恵器の高杯で、3方にスカシ孔を穿つ。表面は摩滅しているが、外面には線刻を確認できる。古墳時代中期の資料が水流によって当地に運ばれたものであろう。2は中国製の青磁である。胎土はやや褐色を帯びており、そのため施釉前に白化粧を施している。底部は露胎とし、二次的に被熱したためか全体的に釉薬は荒れている。3は中国製の白磁で、高台端部のみ露胎とする。また、高台端部には融着防止材として砂が付着している。4は瀬戸美濃焼陶器で、水注あるいは瓶子の底部であらう。



- 【第1層】
 1: 黒褐色(25Y3/2)シルト質砂
 2: 黒色(10YR4/4)シルト質砂
 3: 黒色(10YR2/1)シルト質砂
 4: 黒褐色(25Y3/1)含炭砂
 5: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト質砂
 6: 黒褐色(25Y3/4)シルトと砂の互層
 7: 黒褐色(25Y3/4)粗粒砂
 8: 黒褐色(25Y3/2)含セピナイト砂質シルト
 9: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト質砂
 10: オリーブ褐色(25Y4/4)含炭シルト質砂
 11: 灰黄色(25Y7/2)シルトと中粒～粗粒砂の互層
 12: 灰黄色(25Y7/2)シルトと中粒～粗粒砂の互層

- 【第2層】
 1: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 2: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 3: 黒色(7.5YR6/6)細粒～中粒砂
 4: 黒色(7.5YR7/6)中粒砂
 5: 黒色(7.5YR7/4)細粒～粗粒砂



- 【第3層】
 1: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 2: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 3: 黒色(7.5YR6/6)細粒～中粒砂
 4: 黒色(7.5YR7/6)中粒砂
 5: 黒色(7.5YR7/4)細粒～粗粒砂



- 【第4層】
 1: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 2: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 3: 黒色(7.5YR6/6)細粒～中粒砂
 4: 黒色(7.5YR7/6)中粒砂
 5: 黒色(7.5YR7/4)細粒～粗粒砂

- 【第5層】
 1: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 2: 黒色(7.5YR4/4)シルト質砂
 3: 黒色(7.5YR6/6)細粒～中粒砂
 4: 黒色(7.5YR7/6)中粒砂
 5: 黒色(7.5YR7/4)細粒～粗粒砂

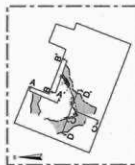


図22 SG201断面図

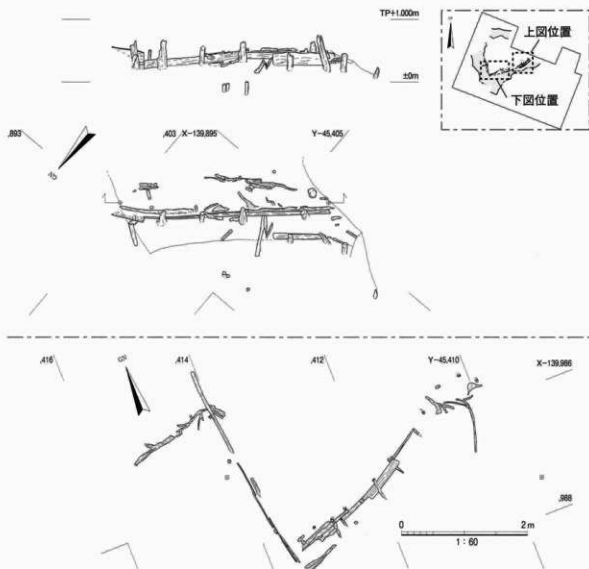


図23 SG201護岸遺構実測図

底径は9.2cmを測る。外面の体部および底面に灰釉を施し、内面の底部にはわずかに自然釉が付着する。割れてから火中したようで、破面も二次的に被熱している。釉薬は剥離した部分が多く、破面も摩滅しているため、ある程度の距離を水流によって運ばれたものと推測できる。5は瓦質土器の羽釜である。口縁部外面はナデ、口縁部内面はハケののちにナデ、外面の鐙部分以下はヘラケズリを施す。口縁部はやや内傾し、全体的にシャープに成形されている。6は土師質の播鉢であり、胎土には雲母を含む。内・外面とも横方向のハケで調整したのち、ナデで仕上げる。口縁部の断面形状はやや下ぶくれの三角形である。7・8は備前焼の播鉢である。このうち7は、硬質ではあるが赤褐色に酸化炎焼成されている。口縁部は薄く、粘土を付加し下方に拡張している。8は7に対してやや還元された状態で焼成されており、色調は灰褐色を呈する。内・外面ともナデで仕上げられており、口縁部は上下に拡張している。また、使用により内面は著しく平滑化している。

瓦には丸瓦9・10と、平瓦11・12がある。このうち丸瓦9は最大で厚さ2.7cmと分厚い。内面には布目圧痕があり、外面はナデを施す。また端面はヘラケズリによって面取りしている。丸瓦10は、凸

面に金箔の痕跡が認められる金箔押し瓦である。長さ11.3cm×幅7.5cmの破片である。凸面は縦方向に削り、その後一部斜めに削っているところがある。凹面にはコビキBが残り、またおそらくは粘土板の接合面で剥離し、部分的に一段低くなっている。端面近くは丸く挟り取っている。側面は角を取るように丸く面取りし、一般的な丸瓦よりもいねいな調整を行っている。金箔の接着剤としての漆は、生漆を使用したためか黒色に発色している。破面が二次的に被熱しており、割れてから火中したと思われる。端部の成形や金箔の残存部位から考えて、雁振り瓦として使用された可能性が高い。平

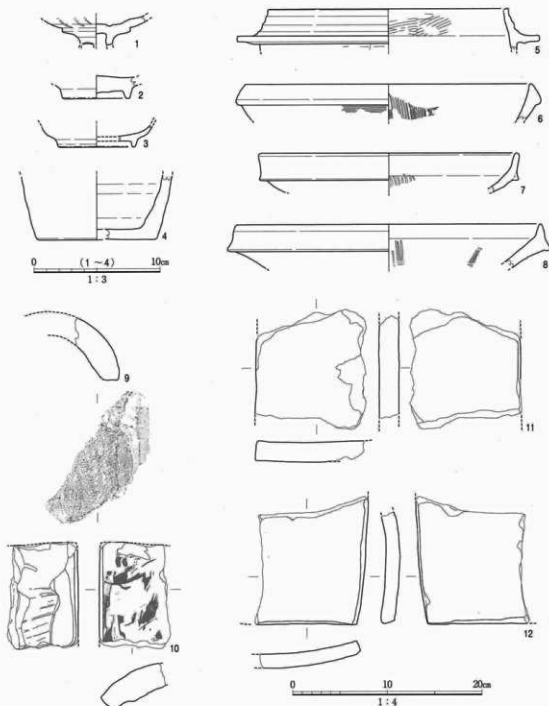


図24 SG201出土遺物(1)

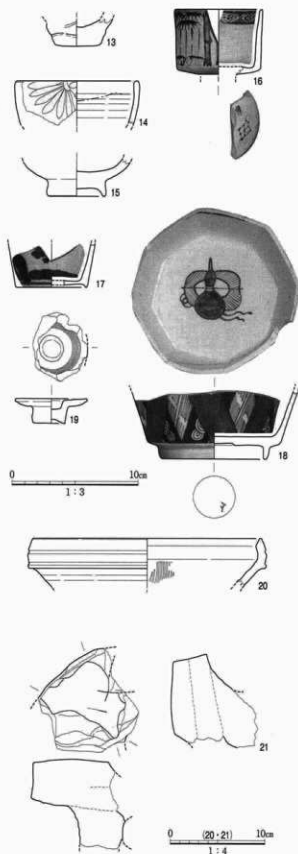


図25 SG201出土遺物(2)
盛土(13~16)、第2次水成層(17~21)

瓦11は2.1cmとやや厚手で、二次的に被熱し断面は赤褐色を呈している。対して12は厚さ1.5cmで、被熱の痕跡はなく灰色を呈している。

以上、SG201第1次水成層から出土した遺物は、瓦質土器の形態や、総数としてはごく少量ながら中国製磁器の中で相対的に青花が少ないなどの組成から考えて、15世紀後半～16世紀前半の資料が主体をなしている。しかしながら、金箔押し瓦10や、細片のため図示できなかったが肥前陶器が出土していることから、少なくとも豊臣後期までの遺物を含んでいる。

護岸のための盛土からは、肥前磁器・肥前陶器・備前焼・関西系陶器・土師質土器・土製品など徳川期の遺物のほか弥生土器が出土した(図25)。

13は弥生時代後期の土器であり、外面はタタキで整形している。関西系陶器14は外面に半菊文を描く。内面は口縁部より下を露胎としており、火入れなどとして製作された可能性がある。肥前陶器15はいわゆる呉器手の碗で、高台端部を除く全面に黄緑色を呈する軸葉を掛ける。肥前磁器の筒形碗16は外面に竹文、口縁部の内面には四方樺文を描く。これらの資料をはじめとして、盛土からは18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土している。

第2次水成層からは、肥前磁器、肥前陶器、備前焼、関西系陶器、土師質土器、土製品、石製品など徳川期の遺物が出土している(図25)。17・18は肥前磁器で、このうち八角形の鉢18は蛇の目凹形高台をもち、アルミナが塗布されている。内面には軍配とヒョウタンを具須で描いている。また、破損面をガラスで焼継いでおり、底面には焼継ぎ印「上」が認められる。19は土製品の壺台で、表面には型離れのための雲母が認められる。これらの遺物は、18の形態的特徴や

焼継ぎの技法から考えて、18世紀末～19世紀前半に下るものである。ただし、相伴した備前焼の摺鉢20は形態からみて本来は16世紀後半まで遡りうる資料であり[石井啓2006]、使用により内面は著しく摩耗し、また二次的に被熱している。上位層からの出土ではあるが、金箔押し瓦10と同時期の資料と思われ、また両者ともに二次的に被熱している点で注目される。須恵器質に焼成されたの鬼瓦片21は、本来は中世後期に属するものである。

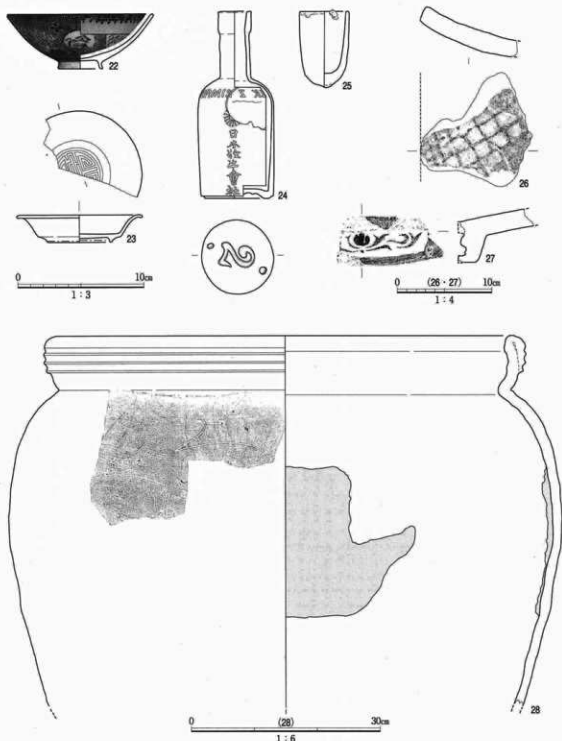


図26 SG201出土遺物(3)

最終的にSG201が埋没することとなる埋立て層からは、近代に下る遺物が出土している(図26)。このうち22は銅版転写による染付平碗で、肥前産かと思われる。23は瀬戸美濃産の白磁で、「寿」字をエンボスするいわゆる寿字文皿である。ガラス瓶24は同じくガラス栓を伴う口縁形状で、肩部には「PERMIS□」・「MILK.Z.T.&C」、体部には、「日本牧牛會社」、また底面には「2」とエンボスしている。砲弾形を呈する土製品25は、口径3.8cm、高さ6.0cmを測る。全面にガラス質が付着していたため蛍光X線分析を行ったところ、鉛・亜鉛・銅・錫を検出した。これら検出された金属の組成、および形態的特徴から、ハンダなどの溶接材を少量製造した増場であった可能性が高い(註1)。平瓦26は著しく摩耗しているが凸面に格子タタキを施しており、古代に属する資料である。軒平瓦27は橘唐草文をもち、近世の資料である。28は備前焼の大甕で、肩部の外面上には焼成前にヘラ描きされており、「上」・「拾」・「土」の3文字が判読できる。内面には白色の物質が付着しており、便槽として使用されたものであろう。

以上に述べたSG201に関する知見をまとめておく。まず第1次水成層の時期には15世紀から豊臣期にかけての遺物が出土しており、また堆積物から見てこの時期には当遺構が流路の一部であった可能性が高い。出土遺物には二次的に被熱した金箔押し瓦が含まれ、その供給地が注目されるところである。その後、17世紀前半～18世紀前半の状況については不明であるが、18世紀後半には護岸のための盛土が行われ、当遺構の積極的な利用が図られる。この目論見は成功したようで、その後は時には周辺の河川からあふれた水が流入しつつ、19世紀前半まで溜池として機能している。ただおそらくは埋積が進み池としての機能を果たし得なくなったため、明治期に至り埋立てられ、当調査区全面が水田として使用されることになる。

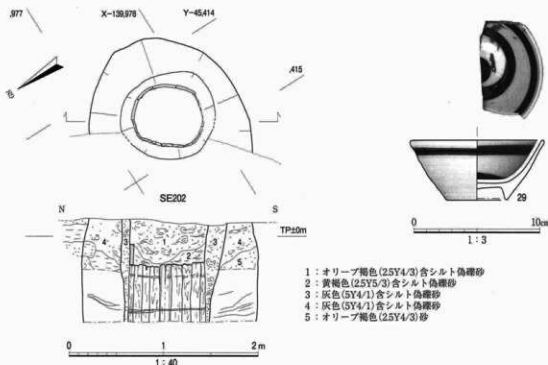


図27 SE202遺構および出土遺物実測図

SE202 SG201が埋立てられた後に掘削された井戸である(図27)。井戸枠として板材を使用しており、その直径は0.80m、掘形の直径は1.72mを測る。検出面から1m強掘削した段階で湧水によって壁面が崩落し、以下は断面の記録を取る事ができなかった。井戸枠内から29など近代の遺物が出土した。

そのほか、SG201の範囲を除くほぼ全域で耕作に伴う鋤溝群を検出した。なお第3層段階でのSR3B06以北では鋤溝が検出されておらず、坪境として踏襲されていた可能性がある。

5) 各層出土の遺物(図28)

第4B～C層から出土した遺物のうち、須恵器36～38、瓦質土器39を図化した。36・37は古代に属する須恵器の壺類底部である。38は外面にタタキ痕がある平底の須恵器で、底面は不調整である。底部内面にはかすかに自然釉が付着する。瓦質土器の羽釜39は口縁部が内傾する形態で、15世紀後半～16世紀前半の資料である。以上のように、第4B～C層からは古代に遡る遺物も出土しているが、瓦質土器39の形態などから見て地層の年代は少なくとも15世紀後半まで下る。

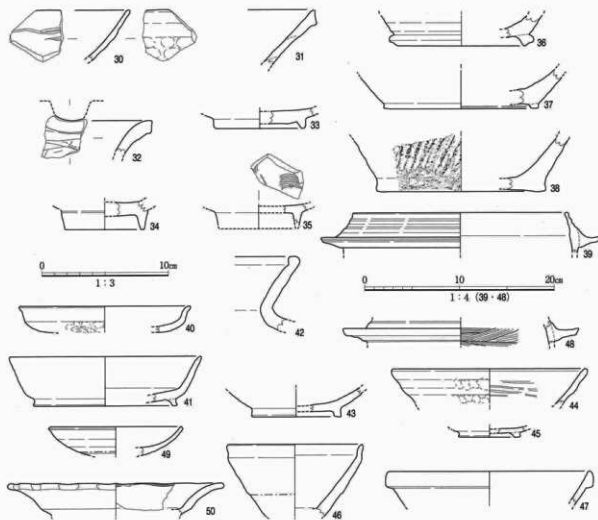


図28 各層出土の遺物実測図

第4B～C層(36～39)、第4A層(30～35)、第3B層(40～48)、第3A層(49・50)

第4A層から出土した遺物では、瓦器30、東播系須恵器31、瓦質土器32、中国製磁器33～35を図化した。和泉型の瓦器碗30は退化が進んでおり、内面のヘラミガキはまばらで、外面にはユビオサエのみ施す。体部の傾きはやや深い、13世紀後半以降の資料である。東播系須恵器の鉢31は端部を欠損するが、口縁部の断面は三角形を呈している。12世紀末から13世紀前半にかけての資料か。瓦質土器の播鉢32は、体部外面をヘラケズリ、そのほかの部分ナデで調整する。二次的に被熱したのか、表面は変色し灰白色を呈している。中国製磁器のうち、33は青磁、34・35は白磁である。33は火の回りが均一でなかったためか、断面の一部は浅黄褐色を呈している。また高台の断面形状は角の丸い台形状を呈し、底部外面は露胎とする。竜泉窯系の資料であろう。白磁34は高い高台をもち、残存する外面全体が露胎である。中世前期に属する資料か。35もやや高い高台をもつ白磁で、底部外面は露胎である。底部内面には襷描きの文様をもつ。中世前期に属する資料であろう。以上、第4A層についてもその年代は中世後期まで下る。

第3B層から出土した資料では、土師器40、須恵器41・42、緑釉陶器43、瓦器44・45、中国製陶磁器46・47、瓦質土器48を図化した。土師器杯40は体部外面をユビオサエ、その他の部位をナデで仕上げる。器高は低く、8世紀末、あるいは9世紀に入る資料である。須恵器杯B41は、口縁部がやや開き、8世紀前半の資料か。壺の口縁部42は口縁部を肥厚させる。緑釉陶器の碗あるいは皿の底部43は須恵器質を呈する硬陶である。器壁の摩滅が顕著でないにも係わらず全体的に釉薬は薄く、なかでも高台内は特に薄い。体部は内外面ともヘラミガキ、高台内はナデで調整する。また、高台は削出して成形している。9世紀後半の平安京近郊窯産である。瓦器碗の口縁部44は摩滅が著しくヘラミガキが十分に図化できなかった。口縁端部の内面に浅い沈線があり、楠葉型である。同じく底部45も摩滅しているが、断面形状は比較的しっかりとした四角形である。46は中国製の鉄胎天目碗である。浅黄褐色を呈する胎土は砂質でやや粗い。釉薬は黒色を呈し、口縁端部など釉薬が薄くなる部分では灰黄褐色を呈している。47は玉縁状の口縁をもつ白磁で、中世前期に多くみられる器種である。瓦質土器羽釜48は口縁部が内傾し、15世紀代におさまる資料である。以上、第3B層から出土した資料は15世紀代を最新とし、第4層との明確な時期差は認められない。

第3A層から出土した遺物では、中国製磁器49・50を図化した。白磁皿49は体部外面下半を露胎とする。口縁部は内湾し、端部は四角くおさめている。50は青磁の輪花皿である。灰色を呈する胎土に白化粧をし、その上から深い青緑色を呈する釉薬を掛ける。内面の口縁端部直下には連続する弧線をヘラで描いている。これらをはじめとして、第3A層から出土した資料についても、中世後期に収まるものである。

以上のように、第4・3層はいずれも中世後期に属する地層であり、遺物からはあまり大きな時期差が抽出できない。

(註)

- 1) 分析にあたっては大阪歴史博物館設置のエネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用い、文化財研究所 伊藤幸司・藤田浩明が実施した。

第IV章 自然科学的分析

第1節 分析の目的と分析試料

1) 分析の目的

今回の分析は、第4B～C層および第5A・B層を対象として以下の3項目の目的を達するために行い、文化財調査コンサルタント株式会社に分析作業を依頼した。

- ①現場における観察で水田作土の床土である可能性を考えた第4B～C層については、その知見を裏付けること
- ②地層が変形していると観察した第5A層については、その変形の要因を推定すること
- ③自然堆積層である第5B層については、堆積時の周辺環境を推定すること

2) 分析試料

上記の目的を達するために必要と考えられる花粉・植物珪酸体・珪藻の各分析を行った。分析を行った試料の数量を表3に示す。また、試料の採取位置、層準については図29に示した。

試料は調査担当者が現場において採取した柱状試料について、文化財調査コンサルタントが同担当者と協議のもとで観察・細分を行い、分析に供した。

表3 分析試料の採取位置、層準および数量

試料採取位置	試料No.	層 準	地層の性格
東 壁	1	第4B～C層	自然堆積層
	2	第5A層	人為擾乱か
	3	第5B層	水成層
	6	第5B層	水成層
深掘り	1	第5B層	水成層
No.1地点	2	第5B層	水成層
深掘り	1	第5B層	水成層
No.2地点	2	第5B層	水成層
試料採取位置 花粉分析 植物珪酸体分析 珪藻分析			
東 壁	4	3	3
深掘り	4	—	2
合 計	8	3	5

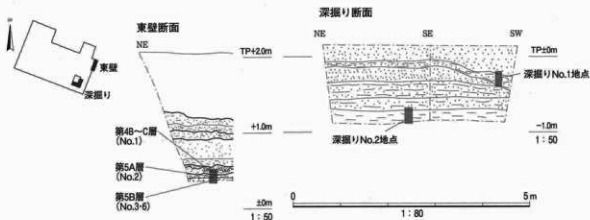


図29 試料採取位置

第2節 花粉分析

1) 分析方法

分析処理の手順は、図30に示すフローのとおりである。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。また、分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下のとおりである。

- ・処理薬品：水酸化カリウム、硫酸、フッ化水素、塩化亜鉛ほか
- ・処理器具、設備：遠心分離機、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

抽出した花粉はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入しプレパラートとする。各試料につき2～3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを光学顕微鏡下の400～1,000倍率で

観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常木本花粉で100～250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、計数も行う。

こうした処理の結果得られた花粉分析用プレパラート、および花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、表4のとおりである。なお、植物片・炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻・火山ガラス・植物珪酸体は、花粉分析処理の残渣を観察した。

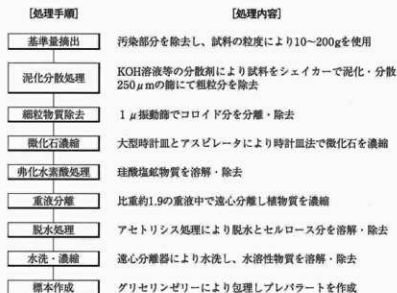


図30 花粉分析処理フロー

表4 微化石概査結果

地点名	試料No.	花 粉	炭	植物片	珪 藻	火山ガラス	プラント・オパール
東 壁	1	◎	△	○	○	○	○
	2	◎	○	○	○	△	○
	3	◎	○	○	△	△	○
	6	◎	△×	△×	△	○	○
深掘り1	1	◎	△	△	△	○	△
	2	◎	△	○	○	○	○
深掘り2	1	○	△	◎	△	○	△
	2	○	△×	◎	○	○	△

凡例 ◎：十分な数量が検出できる
○：少ないが検出できる
△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる
×：検出できない

2) 分析結果

8 試料の花粉分析を行った結果、いずれの試料からも花粉が検出された。検出された花粉は、表5に示す58種類であった。このほか、7種類(形態分類群を除く)の胞子を検出した。これらのうち、花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなものであった。

①卓越本花粉

スギ属、ヒノキ科型、アカガシ亜属

②卓越草本花粉・胞子(栽培種及び栽培の可能性のあるものを含まない)

ガマ属、ミクリ属、イネ科(40ミクロン未満)、カヤツリグサ科

③栽培種花粉(栽培の可能性のあるものを含む)

イネ科(40ミクロン以上)

このうち、分析目的の1つである水田耕作の可能性を追求するために、イネ科花粉を粒径によって40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。稲作が行われる前の自然堆積物では、40ミクロン未満のイネ科花粉が高率となることはあるが、40ミクロン以上のイネ科花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われたと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でも40ミクロン以上のイネ科花粉が高率となることが多くなる。更に稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合、40ミクロン以上のイネ科花粉が高率で検出される。一方、40ミクロン以上のイネ科花粉はイネ属(*Oryza*)を含んでいるが、すべてがイネ属であるわけではない[中村純1974]。これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出される40ミクロン以上のイネ科花粉について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。

上記の状況を踏まえた花粉分析の結果を、花粉ダイアグラム(図31~36)と花粉組成表(表6~8)に示す。花粉ダイアグラムでは、計数した本花粉を基数にし、各々の本花粉、草本花粉などと、一部の胞子について百分率を算出してスペクトルで表した。本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・蕨花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として花粉ダイアグラムに加えて示した。また、別途に試料ごとの含有量(粒数/g)を算出して花粉含有量ダイアグラムとして示した。

以上の結果から導かれる地点ごとの花粉群集の特徴を、花粉群集の変遷が明確になるように、下位から上位に向かい示した。

東壁 4 試料すべてで1,000粒/g程度以上の含有量があり、本花粉群集にも大きな変化は認められず、アカガシ亜属が30~40%、スギ属が20~30%の出現率を示すほか、ヒノキ科型が10~15%程度の出現率を示した。一方、草本花粉群集では、上位の2試料(試料No.1・2)でガマ属、ミクリ属の出現率が高かった。特に試料No.2ではガマ属が49%と高率を示した。また、イネの可能性が大きい40ミクロン以上のイネ科花粉は検出されるものの、30%程度までであった。

深掘り No.1・2 地点のすべてで1,000粒/g程度以上の含有量があり、本花粉群集にも大きな変化は認められず、アカガシ亜属が40%程度、スギ属、ヒノキ科型が10%程度の出現率を示した。一方、草本花粉群集の含有量は少なく、40ミクロン以上のイネ科花粉は数%の出現率を示すのみであった。

なお、以上のように分析を行った8試料で木本花粉群集の変化が乏しいことから、今回の分析では花粉分帯を行わなかった。

表5 検出された花粉の種類一覧表

[木本花粉種類]		[草本花粉種類]		
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属	301 <i>Typha</i>	ガマ属
5	<i>Abies</i>	モミ属	302 <i>Sparganium</i>	ミクリ属
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	306 <i>Sagittaria</i>	オモダカ属
13	<i>Picea</i>	トウヒ属	311 Gramineae (<40)	イネ科: 40ミクロン未満
21	<i>Pinus (Diploxylon)</i>	マツ属: 複雑管束亜属	312 Gramineae (>40)	イネ科: 40ミクロン以上
30	<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	320 Cyperaceae	カヤツリグサ科
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	336 <i>Aneilema</i>	イボクサ属
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	345 Liliaceae	ユリ科
51	<i>Salix</i>	ヤナギ属	411 <i>Rumex</i>	ギシギシ属
52	<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	416 <i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節 - サナエタデ節
62	<i>Pterocarya-fugians</i>	サワグルミ属-クルミ属	422 Chenopodiaceae -Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科
71	<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	430 Caryophyllaceae	ナデシコ科
73	<i>Corylus</i>	ハシバミ属	450 Ranunculaceae	キンボウゲ科
74	<i>Betula</i>	カバノキ属	461 Cruciferae	アブラナ科
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	501 Leguminosae	マメ科
80	<i>Fagus</i>	ブナ属	530 Vitaceae	ブドウ科
83	<i>Quercus</i>	コナラ亜属	580 Umbelliferae	セリ科
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	595 <i>Nymphaoides</i>	アサザ属
85	<i>Castanea</i>	クリ属	611 Lamiaceae	シソ科
88	<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	710 Carduioideae	キク亜科
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	711 <i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタクサ属 -オナモミ属
94	<i>Aphananthe-Celtis</i>	ムクノキ属-エノキ属	712 <i>Artemisia</i>	ヨモギ属
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	720 Cichorioideae	タンポポ科亜科
112	<i>Illicium</i>	シキミ属	[胎子種類]	
132	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	801 <i>Urostachys cryptomerinum</i> type	スギラン型
150	<i>Rhus</i>	ウルシ属	802 <i>Urostachys sieboldii</i> type	ヒモラン型
160	<i>Ilex</i>	モチノキ属	861 <i>Osmunda japonica</i> type	ゼンマイ型
170	<i>Acer</i>	カエデ属	875 <i>Desallia</i>	シノブ属
172	<i>Aesculus</i>	トチノキ属	881 Pteridaceae	イノモトソウ科
183	<i>Camellia</i> type	ツバキ属型	886 Aspid-Asple	オンシダ科-チャセンシダ科
206	<i>Cornus</i>	ミズキ属	891 Polypodiaceae	ウラボシ科
220	Ericaceae	ツツジ科		
230	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属		
241	<i>Ligustrum</i> type	イボクサノキ属型		
246	<i>Fraxinus</i> type	トネリコ属型		

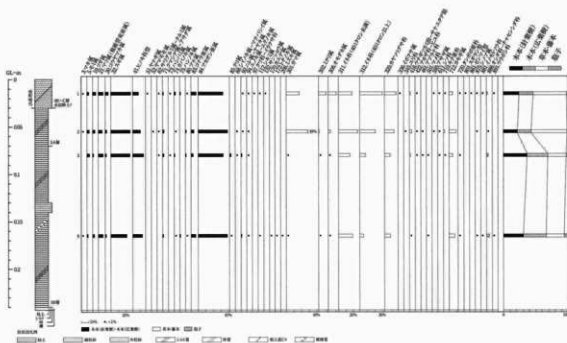


図31 東壁の花粉ダイアグラム

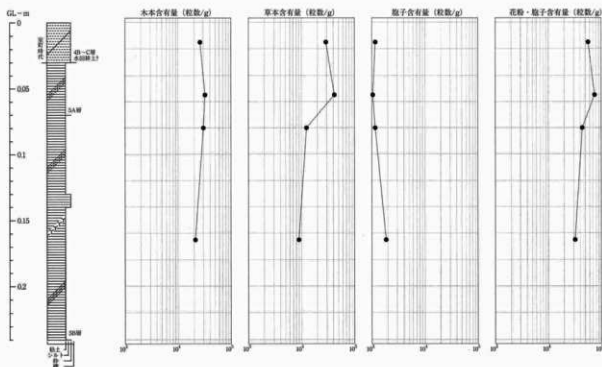


図32 東壁の花粉含有量ダイアグラム

表6 東壁花粉組成表

コ ド	学 名	和 名	試 料 番 号												
			1		2		3		6						
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	0%	77	1	0%	104			1	0%	88		
5	<i>Abies</i>	モミ属	9	3%	697	10	3%	1044	12	4%	1069	4	2%	354	
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	15	4%	1162	10	3%	1044	5	1%	445	6	3%	531	
21	<i>Pinus(Diploxylon)</i>	マツ属：複維管束亜属	22	7%	1704	16	5%	1671	22	7%	1960	15	6%	1327	
30	<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	14	4%	1084	7	2%	731	6	2%	534	4	2%	354	
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	89	26%	6893	80	26%	8355	86	26%	7661	51	21%	4512	
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	26	8%	2014	32	10%	3342	49	15%	4365	31	13%	2743	
51	<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	0%	77										
52	<i>Myrica</i>	ヤマモモ属				1	0%	104							
62	<i>Pterocarya-fugians</i>	サワグルミ属-クルミ属	2	1%	155	1	0%	104	3	1%	267				
71	<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	4	1%	310	6	2%	627	6	2%	534	3	1%	265	
73	<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	0%	77				2	1%	178				
74	<i>Betula</i>	カバノキ属	7	2%	542	3	1%	313	4	1%	356	1	0%	88	
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	4	1%	310							3	1%	265	
80	<i>Fagus</i>	ブナ属	1	0%	77	4	1%	418	4	1%	356	2	1%	177	
83	<i>Quercus</i>	コナラ亜属	23	7%	1781	12	4%	1253	10	3%	891	15	6%	1327	
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	111	33%	8597	121	39%	12638	112	33%	9977	93	39%	8228	
85	<i>Castanea</i>	クリ属							7	2%	624	2	1%	177	
88	<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属				1	0%	104	3	1%	267				
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	2	1%	155	2	1%	209	5	1%	445	3	1%	265	
94	<i>Aphananthe-Celtis</i>	ムクノキ属-エノキ属	1	0%	77	2	1%	209	1	0%	89	1	0%	88	
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	0%	77										
112	<i>Illicium</i>	シキミ属	1	0%	77							1	0%	88	
132	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1	0%	77										
170	<i>Acer</i>	カエデ属											1	0%	88
172	<i>Aesculus</i>	トチノキ属											1	0%	88
206	<i>Cornus</i>	ミズキ属											1	0%	88
301	<i>Typha</i>	ガマ属	58	17%	4492	151	49%	15771	3	1%	267	1	0%	88	
302	<i>Spartanium</i>	ミクリ属	34	10%	2633	4	1%	418	1	0%	89	1	0%	88	
306	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	37	11%	2866	9	3%	940	1	0%	89	1	0%	88	
311	Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	61	18%	4724	80	26%	8355	53	16%	4721	46	19%	4070	
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	101	30%	7822	64	21%	6684	27	8%	2405	12	5%	1062	
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	52	15%	4027	40	13%	4178	25	7%	2227	19		1681	
336	<i>Aneilema</i>	イボクサ属	2	1%	155										
345	<i>Liliaceae</i>	ユリ科				2	1%	209							
416	<i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節-サナエタデ節	4	1%	310	10	3%	1044	5	1%	445	1	0%	88	
422	Chenopodiaceae -Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	1%	232	1	0%	104	1	0%	89				
461	Cruciferae	アブラナ科				3	1%	313	2	1%	178				
501	Leguminosae	マメ科							2	1%	178	1	0%	88	
595	<i>Nymphaoides</i>	アサザ属	1	0%	77	1	0%	104							
611	Lamiaceae	シソ科	1	0%	77	1	0%	104	1	0%	89				
710	Carduoidae	キク亜科	3	1%	232	5	2%	522	1	0%	89				
712	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	16	5%	1239	29	9%	3029	17	5%	1514	18	8%	1592	
720	Cichorioideae	タンポポ亜科	1	0%	77				1	0%	89	1	0%	88	
801	<i>Urostachys cryptomerinum type</i>	スギラン型	1	0%	77										
861	<i>Osmunda japonica. type</i>	ゼンマイ型	1	0%	77										
875	<i>Davallia</i>	シノブ属	1	0%	77	1	0%	104				1	0%	88	
881	Pteridaceae	イノモトソウ科	1	0%	77							1	0%	88	
886	Aspid.-Asple.	オンシダ科-チャセンシダ科	4	1%	310	1	0%	104	7	2%	624	9	4%	796	
891	Polypodiaceae	ウラボシ科	3	1%	232							2	1%	177	
898	MONOLATE -TYPE SPORE	単条溝胞子	1	0%	77	2	1%	209	4	1%	356	1	0%	88	
899	TRILATE-TYPE SPORE	三条溝胞子	3	1%	232	6	2%	627	2	1%	178	7	3%	619	
	木本花粉総数		336	46%	26020	309	43%	32270	337	69%	30018	239	66%	21141	
	草本花粉総数		374	52%	28963	400	56%	41775	140	29%	12469	101	28%	8933	
	胞子総数		15	2%	1159	10	1%	1044	13	3%	1158	21	6%	1856	
	総数		725		56142	719		75089	490		43645	361		31930	

左よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)

表7 深堀り No.1 地点の花粉組成表

コ ド	学 名	和 名	試 料 番 号			
			1		2	
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	0%	46	61
5	<i>Abies</i>	モミ属	10	4%	458	849
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	1%	92	364
13	<i>Picea</i>	トウヒ属	1	0%	46	
21	<i>Pinus(Diploxylon)</i>	マツ属: 擬椎葉東亜属	12	5%	550	425
30	<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	4	2%	183	364
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	35	15%	1604	2063
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	25	11%	1146	1395
51	<i>Salix</i>	ヤナギ属	2	1%	92	61
62	<i>Pterocarya-fugians</i>	サワグルミ属-クルミ属			3	182
71	<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	5	2%	229	425
74	<i>Betula</i>	カバノキ属	1	0%	46	61
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	0%	46	121
80	<i>Fagus</i>	ブナ属	4	2%	183	121
83	<i>Quercus</i>	コナラ属	8	3%	367	243
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	99	42%	4537	6067
85	<i>Castanea</i>	クリ属	1	0%	46	61
88	<i>Castanopsis-Pasania</i>	シノキ属-マテバシイ属			1	0%
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	2	1%	92	121
94	<i>Aphananthe-Celtis</i>	ムクノキ属-エノキ属	1	0%	46	303
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	13	6%	596	243
150	<i>Rhus</i>	ウルシ属			1	0%
160	<i>Ilex</i>	モチノキ属	4	2%	183	61
170	<i>Acer</i>	カエデ属			1	0%
172	<i>Aesculus</i>	トチノキ属			1	0%
206	<i>Cornus</i>	ミズキ属	1	0%	46	
230	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属			2	1%
241	<i>Ligustrum type</i>	イボタノキ属型	1	0%	46	
246	<i>Fraxinus type</i>	トネリコ属型	1	0%	46	
301	<i>Typha</i>	ガマ属	2	1%	92	
311	Gramineae (<40)	イネ科(40ミクロン未満)	33	14%	1512	667
312	Gramineae (>40)	イネ科(40ミクロン以上)	3	1%	137	243
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	2%	229	121
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	0%	46	
461	Cruciferae	アブラナ科			1	0%
501	Leguminosae	マメ科			2	1%
530	Vitaceae	ブドウ科	1	0%	46	
712	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	16	7%	733	607
802	<i>Urostachys sieboldii type</i>	ヒモラン型	2	1%	92	
875	<i>Davallia</i>	シノブ属	8	3%	367	485
881	Pteridaceae	イノモトソウ科	6	3%	275	182
886	Aspid. Asple.	オシダ科-チャセンシダ科	12	5%	550	789
891	Polypodiaceae	ウラボシ科	3	1%	137	
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	14	6%	642	485
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	14	6%	642	546
	木本花粉総数		234	66%	10726	13956
	草本花粉総数		61	17%	2795	1820
	胞子総数		59	17%	2705	2487
	総数		354		16226	18263

左よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)

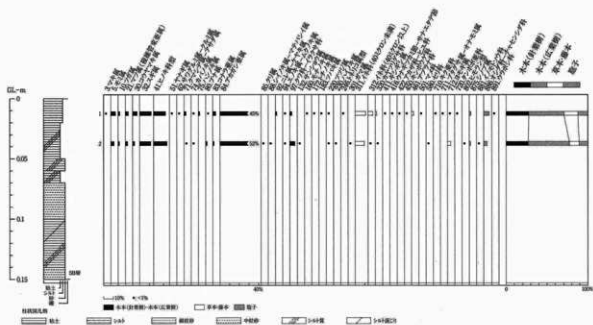


図35 深掘り No. 2 地点の花粉ダイアグラム

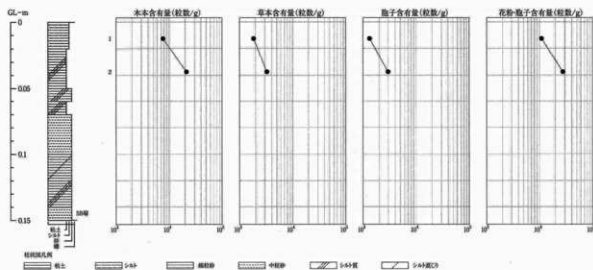


図36 深掘り No. 2 地点の花粉含有量ダイアグラム

表8 深掘りNo.2花粉組成表

コ ト	学 名	和 名	試 料 番 号					
			1			2		
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	0%	34			
5	<i>Abies</i>	モミ属	11	5%	375	7	3%	714
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	2%	136	3	1%	306
21	<i>Pinus(Diploxylon)</i>	マツ属: 複維管束亜属	7	3%	238	5	2%	510
30	<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	11	5%	375	5	2%	510
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	27	12%	919	24	12%	2,447
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	28	12%	953	29	14%	2,957
51	<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	0%	34			
62	<i>Pterocarya-fuglans</i>	サウゲルミ属-クルミ属	1	0%	34			
71	<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	5	2%	170	2	1%	204
74	<i>Betula</i>	カバノキ属	1	0%	34	1	0%	102
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	1%	102			
80	<i>Fagus</i>	ブナ属	2	1%	68	3	1%	306
83	<i>Quercus</i>	コナラ亜属	7	3%	238	3	1%	306
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	101	45%	3,439	109	52%	11,115
85	<i>Castanea</i>	クリ属				1	0%	102
88	<i>Castanopsis-Pasania</i>	シノキ属-マテバシイ属				1	0%	102
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	3	1%	102			
94	<i>Aphananthe-Celtis</i>	ムクノキ属-エノキ属	1	0%	34	1	0%	102
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	2%	170	11	5%	1,122
132	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属				1	0%	102
160	<i>Ilex</i>	モチノキ属	2	1%	68			
172	<i>Aesculus</i>	トチノキ属	2	1%	68			
183	Cameliatype	ツバキ属型	1	0%	34			
220	Ericaceae	ツツジ科	1	0%	34	1	0%	102
230	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属				1	0%	102
246	Fraxinustype	トネリコ属型	1	0%	34			
301	<i>Typha</i>	ガマ属				1	0%	102
311	Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	25	11%	851	20	10%	2,040
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	11	5%	375	2	1%	204
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	1%	102	1	0%	102
411	<i>Rumex</i>	ギンギン属	1	0%	34			
416	<i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節-サナエタデ節	1	0%	34			
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	0%	34			
450	Ranunculaceae	キンボウゲ科	1	0%	34			
461	Cruciferae	アブラナ科	5	2%	170			
501	Leguminosae	マメ科	1	0%	34			
580	Umbelliferae	セリ科				1	0%	102
710	Carduoidae	キク亜科	1	0%	34			
711	<i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタグサ属-オナモミ属	1	0%	34			
712	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	1%	68	7	3%	714
720	Cichorioideae	タンポポ亜科	1	0%	34			
802	<i>Urostachys-sieboldi</i> type	ヒモラン型				1	0%	102
875	<i>Davallia</i>	シノブ属	4	2%	136	3	1%	306
881	Peridaceae	イノモトソウ科				1	0%	102
886	Aspid-Asple	オンダ科-チャセンシダ科	13	6%	443	7	3%	714
891	Polypodiaceae	ウラボシ科	2	1%	68			
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	5	2%	170	6	3%	612
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	15	7%	511	11	5%	1,122
	木 本 花 粉 総 数		226	71%	7693	208	77%	21,211
	草 本 花 粉 総 数		54	17%	1838	32	12%	3,264
	胞 子 総 数		39	12%	1,328	29	11%	2,958
	総 数		319		10,859	269		27,433

左よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)

第3節 植物珪酸体分析

1) 分析方法

分析処理、図37に示すフローのとおり行った。同定は400倍の偏光顕微鏡下で行う。同定は母植物との関係が明らかな種類(樹木を含む)を対象とする(表10)。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求める。

【処理手順】	【処理内容】
試料の乾燥	105℃・24時間
試料分取	約1gを秤量(電子天秤により1/10,000gの精度で秤量)
ガラスビーズ添加	直径約40μm以下、約0.02g(電子天秤により1/10,000gの精度で秤量)
脱有機物処理	電気炉灰化法による
分散処理	超音波洗浄器による(150W・26KHz/15分)
細粒分除去	沈降法による
標本作成	オイキット中に分散しプレパラートを作成

図37 植物珪酸体分析処理フロー

2) 分析結果

3 試料の植物珪酸体分析を行った結果、すべての試料から植物珪酸体(プラント・オパール)が検出された。

表10に示した35分類群(イネ科の機動細胞由来の種類を中心に、母植物との関係が明らかな種類(樹木を含む))について同定・計数を行った。この結果、7分類群が検出され、計数を行った。植物珪酸体分析の結果を、植物珪酸体ダイアグラム(図38)と植物珪酸体組成表(表9)に示す。

以上の結果から導かれる東壁における植物珪酸体群集の特徴として、3 試料ともにネザサ節型が4,000~6,000粒/gと卓越することが挙げられる。またキビ族型が試料No.1・3で、ススキ属が試料No.1・2、ヨシ属が試料No.3で検出される。

表9 検出植物珪酸体組成表

コト	種 類 名	試 料 番 号		
		1	2	3
31	ヨシ属			1
				7
				0.44
61	キビ族型 (アワ・キビ・ヒエを含む)	1		2
		7		14
81	ススキ属型	1	1	
		7	7	
		0.08	0.09	
83	ウシクサ属A	1	1	1
		7	7	7
201	メダケ節型	1		
		7		
		0.08		
		6	8	9
203	ネザサ節型	41	56	62
		0.2	0.27	0.3
207	ミヤコザサ節型	1	1	1
		7	7	7
		0.02	0.02	0.02
	プラント・オパール総数	11	11	14
	カウントガラスビーズ数	445	432	431
	カウ ント 総 数	456	443	445
	試 料 重 量(×0.0001g)	7020	7010	7030
	ガラスビーズ重量(×0.0001g)	140	140	140

上段 検出個数

中段 検出密度(単位: ×100個/g)

下段 推定生産量(単位: kg/m²・cm)

表10 同定・検鏡対象分類群
(同定分類群と推定母植物の関係)

同定分類群	推定母植物
イネ	イネ
イネ初級 (穎の表皮細胞)	イネ
サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・ アシカキ
マコモ属	マコモ
ムギ類 (穎の表皮細胞)	コムギ・オオムギ
ヨシ属	ヨシ
ダンチク属	ダンチク
ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
オヒシバ属 (シコクビエ型)	シコクビエ
シバ属	シバ属
キビ族型	イヌビエ・ (キビ・ヒエ・アワ)
キビ属型	キビ
ヒエ属型	ヒエ・イヌビエ
エノコログサ属型	アワ・エノコログサ
トダシバ属	トダシバ属
ススキ属型	ススキ属
ウシクサ族A	チガヤ属など
ウシクサ族B	サトウキビ属など
モロコシ属型	モロコシ属
ジュズダマ属型	ジュズダマ・ハトムギ
メダケ節型	メダケ節
ネザサ節型	ネザサ節
チマキザサ節型	チマキザサ節・ チシマザサ節
ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
マダケ属型	マダケ属
カヤツリグサ科 (スゲ属など)	スゲ属
シダ類	シダ類
ブナ科(シイ属)	シイ類
ブナ科(アカシラ属)	カシ類
クスノキ科	バババリノキなど (クスノキ以外)
マンサク科 (イスノキ属)	イスノキ属
アワブキ科	アワブキ科
モクレン属型	モクレン属
マツ科型	マツ科
マツ属型	マツ属

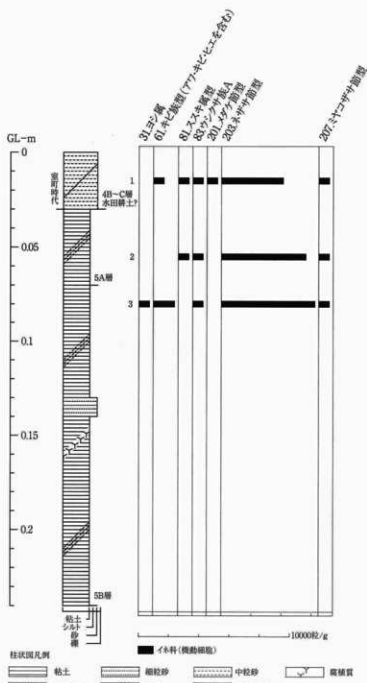


図38 東壁の植物珪酸体ダイアグラム

第4節 珪藻分析

1) 分析方法

分析処理の手順は、[渡辺正巳1995]で示されたフローに従った(図39)。また、1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めた。また、珪藻の含有量を算出するために必要な計量を随時行った。作成した珪藻プレパラートは光学顕微鏡(400~1,000倍)で観察し、帯分析して通常200粒の珪藻の検定・計数を行う。その後、検定・計数結果をもとに珪藻ダイアグラムを作成し、各珪藻種類の変遷傾向から分帯と堆積環境変遷の推定を行う。解析(古環境復元)には、環境指標種群に基づく解析方法と[小杉正人1988、安藤一男1990など]、種ごとに明らかにされている生態型に基づく解析方法があるが、個々の分析結果を検討し、より適した解析方法をその都度採用する。

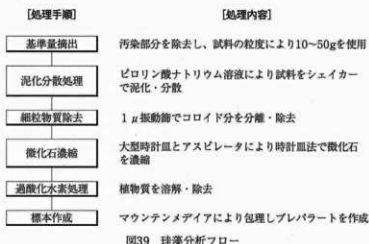


図39 珪藻分析フロー

2) 分析結果

5試料の珪藻分析を行った結果、すべての試料で10,000粒/g程度の珪藻が含有されており、統計処理に十分な数の珪藻が検出できた。今回の分析で検出された珪藻の種類は、表10に示す35種類である。

珪藻分析の結果を、珪藻ダイアグラム(図40・42・44)、珪藻総合ダイアグラム(図41・43・45)と珪藻組成表(表11~13)に示す。珪藻ダイアグラムでは、分類群ごとに検出総数を基数とした百分率を算出し、スペクトルで表した。また、生息域ごとにスペクトルのハッチを変えている。更に、ダイアグラムの右端に珪藻含有量(粒/g)を示した。珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定したすべての種類を対象にそれぞれの要因(生息域)ごとに累積百分率として示した。そのほかの4つのグラフは、淡水種について要因ごとに累積百分率として示した。

以上の結果から導かれる地点ごとの珪藻群集の特徴を、珪藻群集の変遷が明確になるように、下位から上位に向かい示した。

東壁 3試料ともに淡水・浮遊種の *Melosira granulata* が卓越する。これらのうち、試料No.2では *Pinnularia* spp.などの淡水・底生種や、淡水・酸性・底生種の *Eunotia* 属が増加する。

深掘り No.1 地点 淡水・浮遊種の *Melosira granulata* が91%と卓越する。

深掘り No.2 地点 海一汽水種が14%を占める。淡水種では浮遊種の *Melosira granulata* のほか、止水・底生種の *Epithemia turgida* や底生種の *Cymbella* spp. が卓越する。

表11 東壁の珪藻組成表

コ ド	学 名	生息域					試料番号									
		水域	塩分 濃度	Ph	流水	生活	1			2			3			
3	<i>Actinocyclus</i> spp.	海水												1	0%	54
80	<i>Melosira</i> <i>sulcata</i>	海水												1	0%	54
83	<i>Navicula</i> <i>elegans</i>	海水								2	1%	103	1	0%	54	
200	<i>Achnanthes</i> <i>brevipes</i>	汽水					3	2%	126	2	1%	103	9	4%	489	
370	<i>Cymbella</i> <i>cuspidata</i>	淡水	不定	不定	不定	底生				1	1%	52				
398	<i>Cymbella</i> <i>tumida</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	1	1%	42				1	0%	54	
404	<i>Cymbella</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	3	2%	126	13	7%	672	10	5%	544	
438	<i>Diploneis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生							1	0%	54	
450	<i>Epithemia</i> <i>turgida</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生				1	1%	52				
461	<i>Eunotia</i> <i>biarefera</i>	淡水	礫塩	酸性	止水	底生	9	5%	377	18	9%	930	4	2%	217	
482	<i>Eunotia</i> <i>monodon</i>	淡水	礫塩	酸性	止水	底生	2	1%	84	7	4%	362				
489	<i>Eunotia</i> <i>pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	淡水	礫塩	酸性	不定	底生	3	2%	126	6	3%	310	1	0%	54	
491	<i>Eunotia</i> <i>praeurupta</i> var. <i>bidens</i>	淡水	礫塩	酸性	不定	底生	3	2%	126	3	2%	155	1	0%	54	
500	<i>Eunotia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	4	2%	168	7	4%	362				
560	<i>Gomphonema</i> <i>acuminatum</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	1	1%	42							
576	<i>Gomphonema</i> <i>gracile</i>	淡水	不定	不定	止水	底生				1	1%	52				
684	<i>Melosira</i> <i>granulata</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊	130	71%	5,446	82	41%	4,239	156	75%	8,480	
796	<i>Navicula</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	2	1%	84	2	1%	103				
884	<i>Pinnularia</i> <i>cardinaliculus</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	3	2%	126	7	4%	362	3	1%	163	
886	<i>Pinnularia</i> <i>divergens</i>	淡水	礫塩	酸性	不明	底生				2	1%	103				
916	<i>Pinnularia</i> <i>nodosa</i>	淡水	不定	酸性	不定	底生							1	0%	54	
930	<i>Pinnularia</i> <i>viridis</i>	淡水	不定	不定	不定	底生				1	1%	52				
932	<i>Pinnularia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	12	7%	503	36	18%	1,861	7	3%	381	
940	<i>Stauroneis</i> <i>acuta</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生				1	1%	52	1	0%	54	
943	<i>Stauroneis</i> <i>phoenicenteron</i>	淡水	不定	不定	不定	底生				2	1%	103				
945	<i>Stauroneis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	7	4%	293	5	3%	258	9	4%	489	
955	<i>Stephanodiscus</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊				1	1%	52				
海 水 生 種 合 計							0	0%	0	2	1%	103	3	1%	162	
海～汽水生種合計							0	0%	0	0	0%	0	0	0%	0	
汽 水 生 種 合 計							3	2%	126	2	1%	103	9	4%	489	
淡 水 生 種 合 計							180	98%	7,543	196	98%	10,132	195	94%	10,598	
合 計							183		7,669	200		10,338	207		11,249	
完 形 数							58			53			61			
完 形 率							32%			27%			29%			

右よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)



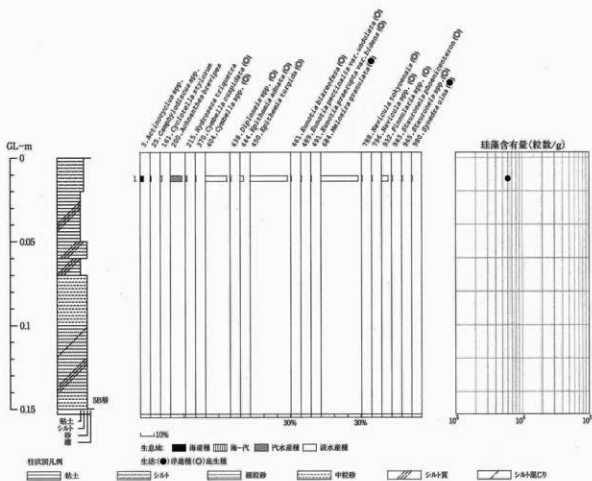


図44 深掘りNo.2地点の珪藻ダイヤグラム

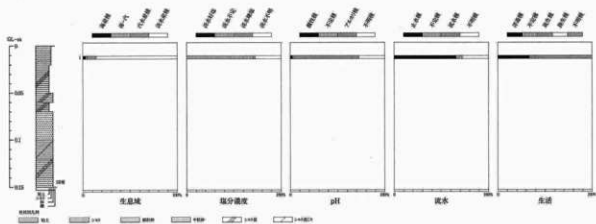


図45 深掘りNo.2地点の珪藻総合ダイヤグラム

表12 深掘り No. 1 地点の珪藻組成表

コード	学 名		生息域					試料番号	
			水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	1	
161	<i>Cyclotella</i>	<i>stylorum</i>	海～汽水					1	0%
200	<i>Achnanthes</i>	<i>brevipes</i>	汽水					5	2%
450	<i>Epithemia</i>	<i>turgida</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	2	1%
461	<i>Eunotia</i>	<i>biareofera</i>	淡水	雌塩	酸性	止水	底生	1	0%
491	<i>Eunotia</i>	<i>praeupta</i> var. <i>bidens</i>	淡水	雌塩	酸性	不定	底生	1	0%
684	<i>Melosira</i>	<i>granulata</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊	185	91%
700	<i>Melosira</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊	3	1%
932	<i>Pinnularia</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	4	2%
955	<i>Stephanodiscus</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊	1	0%
海 水 生 種 合 計								0	0%
海～汽水生種合計								1	0%
汽 水 生 種 合 計								5	2%
淡 水 生 種 合 計								197	97%
合 計								203	42.85%
完 形 数									108
完 形 率									53%

右よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)

表13 深掘り No. 2 地点の珪藻組成表

コード	学 名		生息域					試料番号	
			水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	1	
3	<i>Actinocyclus</i>	spp.	海水					4	2%
25	<i>Camphylodiscus</i>	spp.	海水					1	1%
161	<i>Cyclotella</i>	<i>stylorum</i>	海～汽水					2	1%
200	<i>Achnanthes</i>	<i>brevipes</i>	汽水					14	9%
215	<i>Hydrosera</i>	<i>triquetra</i>	汽水					2	1%
370	<i>Cymbella</i>	<i>cuspidata</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	1	1%
404	<i>Cymbella</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	26	16%
438	<i>Diploneis</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	1%
444	<i>Epithemia</i>	<i>adnata</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生	4	2%
450	<i>Epithemia</i>	<i>turgida</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	底生	45	28%
461	<i>Eunotia</i>	<i>biareofera</i>	淡水	雌塩	酸性	止水	底生	1	1%
489	<i>Eunotia</i>	<i>pectinalis</i> var. <i>undulata</i>	淡水	雌塩	酸性	不定	底生	1	1%
491	<i>Eunotia</i>	<i>praeupta</i> var. <i>bidens</i>	淡水	雌塩	酸性	不定	底生	1	1%
684	<i>Melosira</i>	<i>granulata</i>	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊	45	28%
788	<i>Navicula</i>	<i>tokyoensis</i>	淡水	不明	不明	不明	底生	1	1%
796	<i>Navicula</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	1%
932	<i>Pinnularia</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	8	5%
943	<i>Stauroneis</i>	<i>phoenicenteron</i>	淡水	不定	不定	不定	底生	1	1%
945	<i>Stauroneis</i>	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	1%
980	<i>Synedra</i>	<i>uina</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊	1	1%
海 水 生 種 合 計								5	3%
海～汽水生種合計								2	1%
汽 水 生 種 合 計								16	10%
淡 水 生 種 合 計								138	86%
合 計								161	6.06%
完 形 数									15
完 形 率									9%

右よりカウント粒数、百分率、含有量(粒数/g)

第5節 考察

1) 分析試料の堆積時期について

大阪府北部(淀川以北)の茨木市内玉櫛遺跡[川崎地質株式会社1994]や東京良遺跡[川崎地質株式会社1995]では、弥生時代から中世にかけての花粉群集が得られている。ここでの特徴は、平安時代頃まではアカガシ亜属が卓越し、中世前期頃以降マツ属(複維管束亜属)に卓越種が変わる。一方、スギ属が弥生～平安時代の間でピークを成す。この際に、スギ属がアカガシ亜属と同程度の出現率を示すようになる場所もある。また、マツ属(複維管束亜属)が増加を始めるのは、スギ属が減少に転じる頃からである。

今回得られた花粉群集の特徴は、アカガシ亜属が卓越し、スギ属、ヒノキ科型を伴い、マツ属(複維管束亜属)は低率である。同様の花粉群集を、先の例で探してみると、弥生～平安時代までの花粉群集に類似する。したがって、第5B層、第5A層、第4B～C層ともに弥生～平安時代までの植生を反映しているものと推定できる。

一方、今回の分析試料最上位に位置する東壁試料No.1の層準は第4B～C層に対応し、中世後期の堆積物であると推定されている。このことは、花粉群集からの推定年代と矛盾する結果であった。

このような現象が起こる原因として、2つの可能性が指摘できる。1つは、いずれかの堆積時期の推定が間違っている可能性である。もう1つは、堆積時期の推定が正しいものの、局地的な植生により、見かけ上花粉群集が似通った可能性である。淀川北岸の平野部という大きな括りの中で、茨木市に位置する両遺跡と今回の調査地点は10kmほどの距離しかなく、ほぼ同一地点と捉えることができる。同じである。検出された花粉の由来を考えると、いずれの地点も淀川水系と見なすことが可能であり、大きな差が生じるとは考えにくい。ただし、近くの植生ほど検出された花粉群集への影響は大きく、それぞれの遺跡を流れる河川沿いの植生が異なれば、影響は花粉群集にも現れるはずである。さらに、調査地点近辺での木本植生の違いは、花粉群集に大きな違いとして表れる。

2) 耕作層について

前述のように東壁試料No.1層準は第4B～C層とされ、中世後期に属する水田の床土である可能性が示唆されていた。植物珪酸体分析では、キビ、ヒエ、アワの可能性のあるキビ族型がわずかに検出されたものの、イネは全く検出できなかった。一方、花粉分析では、イネの可能性のある40ミクロン以上のイネ科が30%の出現率を示すが、水田雑草に由来する種類も高率を示す。また、40ミクロン以上のイネ科のほか、栽培と関連する種類の花粉は検出されなかった。珪藻分析では止水・浮遊種が卓越し、やや水深のある沼沢地で堆積した可能性が高い。

現場での観察では、第4A層は作土、第4B層は床土あるいは畦畔を構成する層、第4C層は床土あるいは自然堆積層と考えた。作土の場合、栽培関連の花粉や植物珪酸体が多量に検出されると推定される。一方、水田作土であれば淡水・底生の珪藻が卓越し、畑作土であれば陸生種が卓越するか、珪藻

が検出されないものと推定される。

以上の仮説を今回の分析結果に当てはめると、花粉群集、植物珪酸体群集、珪藻群集のいずれも、床土、畦畔を構成する層、あるいは自然堆積層と考えた第4B～C層の観察結果と整合的なものである。

3) 第5A層の変形要因について

今回の結果からは、地層が変形していると観察した第5A層について、花粉群集、植物珪酸体群集、珪藻群集のいずれからも、その要因を積極的に推測することはできなかった。ただSZ98-1次調査では噴砂が検出されており、第5A層の変形も地震などに起因する可能性がある。今後、そうした可能性をも視野に入れながら当地周辺における地層観察、分析を行う必要があろう。

4) 古環境

i) 丘陵から山地の森林植生

第5B層下部から第4B～C層にかけての時期に、調査地周辺から北方の千里丘陵や北摂山地にかけての森林植生に大きな変化は認められなかった。ここでは、カシ類を主要素とする照葉樹林が広く分布し、谷筋や扇状地端部にはスギ林が分布していたと推定される。山地中腹から高所には、高槻市本山寺に残存する温帯針葉樹(モミ・ツガ林)が分布していたと考えられる。

ii) 調査地近辺の堆積環境

堆積相の変化が激しく、堆積環境が頻繁に変化していたと推定される。珪藻群集では、第5B層下部で海-汽水種が他の層準に比べやや高く、時折海水の影響を受けていたことが分かる。また、全体に淡水・浮遊種が卓越傾向にあることから、やや水深のある沼沢地であったと考えられる。ただし底生種が高率になる層準では、やや水深が浅くなったものと考えられる。

iii) 調査地近辺の植生

沼沢地であった調査地周囲の水辺にはアシ原が広がり、部分的にガマ類が繁茂していたと考えられる。東壁地点での分析結果から、第5A層、第4B～C層の堆積時にガマ類や密生し、ミクリ類も近くに分布していたと考えられる。

第V章 遺構と遺物の検討

第1節 西淡路1丁目所在遺跡出土の金箔押し瓦について

1) 大阪市内における金箔押し瓦の出土状況

大坂で金箔押し瓦が出土している範囲は、豊臣期大坂城本丸・二ノ丸・三ノ丸・惣構と船場城下町、天満城下町の中である。

2000年までに出土した金箔押し瓦を報告した中に金箔押し雁振り瓦の出土例は少なく[宮本佐知子・寺井誠2003]、その可能性があるものを含めても4点のみである。それは大坂城の南西に位置する現・大阪歴史博物館敷地内で検出した武家屋敷(NW87-20次調査)で1点[大阪市文化財協会1992]、惣構東部の現在の地下鉄鶴見緑地線森ノ宮駅の調査(OS92-74次調査)で1点[大阪市文化財協会1992]、大坂城の北の平野川に架かる「新鴨野橋」下部で行われた調査(OS86-32次)で雁振り瓦の可能性のある破片が1点[大阪市文化財協会1992]、出土しているにすぎない。ほかに大阪府文化財センターの調査で、三ノ丸内の堀埋土から1点の雁振り瓦が報告されている[大阪府文化財センター2006]。

当協会の2000年度までの調査で出土した金箔押し瓦は987点で、その中の約61%に当たる604点が飾瓦である。飾瓦の中で、用途不明の47点と軒周辺に使われた2点を除くと、555点が棟の飾瓦である。こうした組成から、豊臣期の金箔押し瓦を葺いた建物の屋根は棟を高くし、かつ金箔押し瓦はその棟の装飾を意図して使用されていたことが明らかである。その中で、棟に使用されるものでありながら雁振り瓦が3点と少ないのは、金箔を押しした凸面を空に向けて葺くため、接着に使っている漆が日にあたって乾燥したり、雨で流されたりして金箔が剥げたりするものが多いので、金箔押しの雁振り瓦と特定できるものが少ないのではないかと考えられる。また鱗瓦中には漆を何層にも塗り重ねる例があるのに比べ、雁振り瓦にみられる金箔は漆を厚く塗っているとは思えないので、使用方法のみならず製作技法も影響して箔が失われやすく、出土例が少ない可能性も考えられる。

2) 西淡路1丁目所在遺跡で金箔押し瓦が出土する意味

全国的にみて金箔押し瓦の出土する遺跡は城郭や武家屋敷であって、それ以外では、京都の豊国神社と熊本の名古屋城内の御霊屋敷、大阪府の堺環濠都市遺跡、京都府の興隆寺跡のみである[中村博司1995]。豊国神社は豊臣秀吉を祀る神社で、御霊屋敷の例は伴出陶器瓦の銘が延享2年と3年(1745・1746)であり、この2例は豊臣時代の大坂での金箔押し瓦の使用を考える上で直接関係はない。したがって、以下では残る2例について検討する。

大阪府の堺環濠都市遺跡では、機械掘削時に金箔押し軒丸瓦が1点出土している[堺市教育委員会1993]。下層に金箔押し瓦を葺いた建物も見つかっておらず、ほかに周辺からの金箔押し瓦の出土例がない。調査地の南には伝承「千利休 椿井」があるが、関連する遺構は見つかっていないので(註1)、

金箔押し瓦を葺いた建物があった可能性の低い所からの出土である。

また京都府向日市の興隆寺跡では遺構面上層から1点の金箔押し軒丸瓦が出土している[京都府教育委員会1976]。その後の向日市の調査で、この寺は天正年間の後半(1583~1592年)に建てられたとの伝承があり、朝鮮出兵にともなって街道を整備し、方1町の外周の堀をめぐらしたことも明らかにってきている[向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会1993]。また、開祖日堯が豊臣秀吉と同郷のためにその庇護を受け[向日市文化資料館1992]、そのために金箔押し軒丸瓦も興隆寺で葺かれていたのではないかと考えられる(註2)。この興隆寺の出土例によって、豊臣期の金箔押し瓦の葺かれる範囲が城郭や武家屋敷だけでなく、寺院にもその枠が広がる可能性が高くなった。

改めて大坂城から川を隔てたこの地で出土した1点の金箔押し瓦の可能性を考えると、調査地の南東500mに中世後半の有力寺院である崇禪寺がある。天正年間に兵火で諸堂宇を焼失したとのことであり[平凡社地方資料センター編1986]、それらの建物の一部に金箔押し瓦が葺かれていたのであろうか。興隆寺のように豊臣秀吉との関係が推定できるわけではないが、その可能性がないとは言えないのではないだろうか。



図46 豊臣期における金箔押し瓦出土地点([宮本佐知子・寺井誠2003]より作成)

第2節 西淡路1丁目所在遺跡と周辺遺跡の動態

本節では地形の発達と遺跡群の変遷について、先行研究の成果[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]を踏まえながら論じることとする。

1) 古地形の概観

当地周辺の現地表面の標高は、東半の崇禪寺遺跡側がTP+3.0m前後と高く、西へ行くに低くなり宮原遺跡一帯ではTP+1.5mほどである。この地形の高低はベースとなる水成層についても同様であり、崇禪寺遺跡側でTP+2.0m前後、宮原遺跡側ではTP+1.0mほどである。このうち崇禪寺側の高地が形成された要因については、大阪湾の沿岸流で形成された「長柄砂州」の一部であるとする見解があった[梶山・市原1986]。だが、崇禪寺遺跡や西淡路1丁目所在遺跡における水成層の観察結果からはおおむね東→西、あるいは北→南の古流向が復元できる(図48)。また豊碓遺跡と同心町遺跡、国分寺跡など淀川右岸に立地する諸遺跡でも同様の観察結果が得られているため、当地の地形の形成要因を主として淀川の堆積作用に求める意見が提出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c・2009]。今回の調査成果も、これと整合的なものである。

図47には、各調査における地層に係わる成果を柱状図としてまとめた。なお、大阪市およびその周辺部では、工業用水やビル用水として地下水が汲上げられ、激しい地盤沈下を引起こしたことが知られている。今回の報告書で対象とする新淀川-神崎川地域も例外ではなく、昭和10~60年までの50年間に1.0~1.8m程度の地盤沈下が起こっている[林田精郎ほか1987]。この地盤沈下はおおむね東北側で沈降量が少なく西南側で多い不等沈下であるが、今回対象とする東西約1.3km、南北約0.7kmの範囲でおおまかな地形の傾向を把握する上では大過ないものと考えた。

2) 各時期の動態

i) 弥生時代末~古墳時代初頭

図48には、周辺遺跡における各時期の遺構・遺物の有無、また現状の調査成果から導かれる土地利用などについて時期別にまとめている。

まず弥生時代末~古墳時代初頭では、崇禪寺遺跡の成果が著名である。その詳細や評価については既刊の報告書を参照されたいが[大阪市文化財協会1999]、先に見た地形形成に関する見解をふまえると、淀川の水流によって形成された微高地上を選択的に利用したことは明確である。該期の崇禪寺遺跡については「港湾集落」との評価があるが[櫻井久之1999]、そうした遺跡の性格と選地がどのように関連していたかは、今後の検討課題である。

またこの時期には西淡路1丁目遺跡以西ははまだ陸化しておらず、該期の遺物は水成層から出土したり(WA06-1次/図48-⑩)、あるいは今回の調査(同⑫)のように本来の遺構や地層から遊離した状態で出土する。このうちWA06-1次調査は、堆積物の観察から該期には淀川河口付近の三角州や

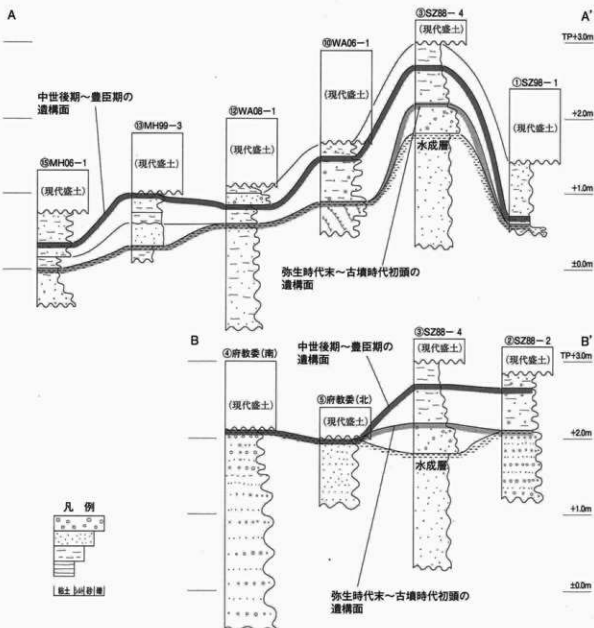
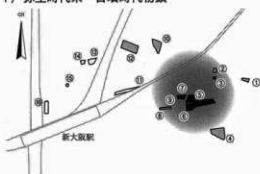
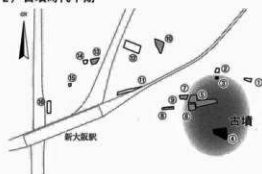


図47 周辺調査区の柱状図対比

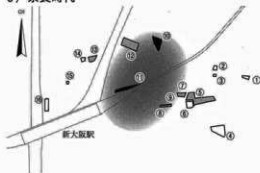
1) 弥生時代末～古墳時代初頭



2) 古墳時代中期



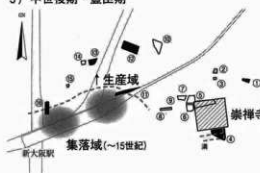
3) 奈良時代



4) 平安時代～中世前期



5) 中世後期～豊臣期



凡 例

- : 該期の遺構・遺物を検出した調査区
 ■ : 該期の遺物のみを検出した調査区
 □ : 該期の遺構・遺物ともに報告されていない調査区
 ※縮尺は各図とも2万分の1である。

番号	調査次数	古 流 向	各時期における遺構・遺物の有無				
			弥生時代末～ 古墳時代初頭	古墳時代中期	奈良時代	平安時代～ 中世前期	中世後期～ 豊臣期
①	SZ98-1	東南東→西北西	○				○
②	SZ88-2	—				○	○
③	SZ88-4	—	○	○		○	○
④	府教委調査	北北東→南南西	○	○			○
⑤	府教委調査	—	○	○	○		
⑥	SZ89-6	—	○	○			
⑦	SZ89-13	—	○	○	○		
⑧	SZ01-4	東→西	○		○	○	
⑨	SZ02-1	—	○	○			
⑩	WA06-1	北北東→南南西	○	○	○	○	
⑪	WA07-1	—				○	○
⑫	WA08-1	北北東→南南西	○		○	○	○
⑬	MH99-3	—		○	○		○
⑭	MH06-2	—				○	
⑮	MH06-1	—				○	○
⑯	MH94-2	—				○	○

※「○」: は該期の遺物が存在することを示し、遺構も検出されている場合は枠を網掛けとした。

図48 周辺遺跡における遺構の変遷

滞であったと推定されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c]。

ii)古墳時代中期

当地周辺においては、古墳時代前期に属する遺構は未検出である。この時期には淀川によって「長柄砂州」が決壊したとする説があり[梶山・市原1986]、そうした水害と遺跡の衰退が関連する可能性もあるが、古墳時代前期の水害について、現状では考古学的に立証できる段階にはない。

古墳時代前期の中断期を挟み、古墳時代中期にもやはり崇禪寺遺跡での成果が目される。現・崇禪寺の南側で行われた調査(図48-④)において古墳の痕跡が確認されているほか[大阪府教育委員会2003]、SZ88-4次調査でも遺構が検出されている[大阪市文化財協会1999]。

西淡路1丁目所在遺跡以西では該期の遺物が出土するものの遺離資料であり、この時期にもまだ陸化していないことを推測させる。

iii)奈良時代

古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、再びこの地域では人間活動の明瞭な痕跡を認めることができなくなる。

再度遺構の形成が進むのは、奈良時代を待たねばならない。この時期には崇禪寺遺跡から宮原遺跡まで、比較的広汎に遺物が分布する一方で遺構に伴わない場合が多く、明確な遺構が検出されたのは西淡路1丁目所在遺跡の2例のみである(図48-⑩・⑪)。淀川の沖積作用による陸化が進み、これに伴って人間活動も西へ移動したものと評価できるだろう。

なお先に第二章で見たように、当地一帯で条里制が古代に施工されたとする説があるが、発掘調査で検出されている遺構で古代に遡るものは少なく、方位を把握できる遺構もないため、積極的にその存在を論じることはできない。また中世以降には方位を把握できる溝や畦畔などの遺構が検出されているが、現状の地割とほぼ同じ方向を採るものが多く、それらは自然地形の傾斜に規制されたと考えられるものが多い。自然地形に規制されながらも規則性をもった土地区画が存在したかについては、今後の検討課題である。

iv)平安時代～中世前期

この時期には遺物の分布がさらに広がるとともに、遺構の検出地も西方へと移動する。平安期の遺構・遺物も出土するが、とりわけ顕著となるのは中世前期であり、この時期まで明瞭な遺構が検出されなかった宮原遺跡において密な遺構分布を示す調査地がある(MH94-2次/図48-⑤)。また西淡路1丁目所在遺跡でも該期の集落域が検出されており(WA07-1次/図48-⑪)、注目される。こうした考古学的成果と関連するものとして重要なのは、文献史料に見える「宮原庄」の存在である。宮原庄は1220(承久2)年の「大善法寺祐清譲状」などの文献史料にその名が見え、その後、奈良春日社・興福寺がこの地で所領を拡大し、南北朝期には付近一帯が春日社領宮原庄、興福寺領宮原北庄として記録に現れる。また、宮原北庄に対して宮原南庄が存在したという[平凡社地方資料センター編1986]。

MH94-2次、WA07-1次調査の両成果が一連の集落域として復元できるのか、あるいは文献史料で区別されている各荘に対応するのかなどはまだ明らかでない。だが両調査地が宮原庄の一面を構成したことはほぼ間違いないと考えてよく、またMH94-2次の北半以北、WA07-1次調査の東半以东では水田耕作地が広がっており、今後の調査の進展によって宮原庄の具体的な景観を明らかにできる可能性がある。

v) 中世後期～豊臣期

15世紀に創建された崇禅寺が、当地に1つの画期をもたらす。崇禅寺の正確な創建年代は不明であるが、1441(嘉吉元)年に殺害された將軍義教の菩提を弔うために建立されたと伝えられるので、少なくともそれ以降のことである。この崇禅寺建立によって、崇禅寺遺跡でも再び遺構・遺物が検出されるようになる。崇禅寺と直接的に係わる遺構として、大阪府教育委員会調査地(図48-④)において検出された2重の堀が注目される[大阪府教育委員会2003]。同様の堀は四天王寺旧境内遺跡[大阪市文化財協会1996]や阿倍寺[大阪市文化財協会2001a]でも検出されており、これらのうち四天王寺周囲の堀は崇禅寺と同様に多重となっている可能性が高い。また該期の集落についても、苅田4丁目所在遺跡で堀が検出されているほか[大阪市文化財協会2008]、考古学的な知見はまだまだ十分ではないが、平野環濠都市遺跡でも文献史料や現地地形などから堀の存在が知られる。これらが単に寺院や集落を区画するものなのか、あるいは戦乱の多発していた中世後期という時代相を反映し防御性を強く念頭において掘削されたものなのかについては議論を要するが、中世後期において堀を掘削するという行為が大阪市内においてもある程度普遍化できる可能性がある。

さて、該期に属する資料として、今回の調査で出土した金箔押し瓦について若干の考察を加えたい。すでに確認したように、この金箔押し瓦は徳川期の溜池SG201の下部に存在する第1次水成層から出土した。当該資料は二次的に被熱しており、また形状から雁振り瓦である可能性が高い。金箔は多くの部分で剥げ落ち、点状に残存するのみである。出土層である第1次水成層からは豊臣期までの遺物が伴出しており、また地層の観察からこの第1次水成層は東から西への水流によって堆積したものである。徳川期の当地一帯には旧流路や氾濫の痕跡を利用した大小の池が存在したとされ[西成郡役所1962]、そうした池・沼のうちいくつかは明治期の地図でも確認できる。今回検出したSG201についても、そうしたものの1つである可能性が高い。すなわち、豊臣期においてSG201は自然流路の一部であり、金箔押し瓦はこの自然流路によって東方から運ばれてきたものである。

ここで問題となるのは、金箔押し瓦を使用した施設である。脆弱な金箔が残存していることから、当該施設は調査地の近辺に存在したと考えられる。前節で見たように金箔押し瓦は武家屋敷や城郭での出土例が圧倒的多数で、その他の例としては豊臣家との関連が指摘できる神社・寺院がわずかに知られているにすぎない。だが近隣には武家屋敷や城郭は想定できず[櫻井成廣1970]、残る可能性である神社・寺院についても、金箔押し瓦を使用しうる経済力を有していた可能性があるのは東南500mの位置に存在する崇禅寺のみであろう。崇禅寺については天正年間に戦乱のため焼亡したとの記録があり[平凡社地方資料センター編1986]、今回出土した金箔押し瓦が二次的に被熱していることとの関

連性が注目される。ただ該期の崇禪寺の性格については、豊臣家よりも、むしろ足利將軍家との強い結びつきが指摘されている[野高宏之2008]。また、崇禪寺に係わる遺物が投棄されている可能性が高いと推測される、大阪府教委調査地で検出した堀から出土した瓦全点について観察を行ったが、金箔押し瓦は存在しなかった(註3)。このように、現状では可能性を指摘するに留まるが、今回の調査で出土した金箔押し瓦が使用された施設の最有力候補として、崇禪寺を挙げておきたい。

vi) 徳川期

淀川の水流を安定するために堤防の構築や用水の掘削が行われ、その一環として今回の調査地では溜池が造られていた。このことに代表されるように、当地一帯は集落域を除く大部分が作土化され、そのあり方は戦後まで連続することとなる。

(註)

- 1) 堺市教育委員会 嶋谷和彦氏の御教示による
- 2) 向日市教育委員会 関下多美樹氏の御教示による。
- 3) 資料調査にあたっては、大阪府教育委員会 三宅正浩氏・亀島重則氏にお世話になり、貴重な助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

第VI章 調査成果のまとめ

以下、今回のおもな調査成果を時代の古いものから順に述べる。

1) 中世前期以前

弥生時代末～中世前期については、各時期の遺物が出土したものの、遺構は検出できなかった。ただし、ベースとなる水成層(第5B層)に対して実施した自然科学分析の結果からは、該期にこの場所がやや水深のある沼沢地であったこと、また周囲にはアシ原が広がり、部分的にガマ類が繁茂していた環境が明らかにできた。また、時折海水の影響を受けたり、水深が浅くなったりすることがあったことも推定できた。

2) 中世後期

該期には当地は主として農業生産域として機能しており、水田畦畔や土壌を検出した。南方に位置するWA07-1次調査地やMH94-2次調査地では15世紀までの集落域が検出されて「宮原庄」との関連が指摘され、また南東では崇禪寺が興っている。こうした拠点集落・寺院との関係が注目される。

また水田畦畔を検出し、当該期の耕作を姿を明らかにした。

3) 豊臣期

徳川期の溜池SG201の下位層において、豊臣期の水成層を検出した。同層からは金箔押し雁振瓦が出土しており、淀川以北では大阪市内初の出土例として注目される。なおこの金箔押し瓦が葺かれていた建物については現在特定できないが、南東に位置する崇禪寺がその最有力候補として挙げられる。

4) 徳川期以降

中世後期以降、徳川期を経て現代に至るまで、調査地は耕作地として利用された。豊臣期に当地を襲った水流は徳川期には溜池として積極的に利用され、18世紀には護岸のための土手が整備された。ただし徐々に埋没したため、この溜池は明治期に至って埋立てられ、以後は日之出住宅の建設直前で、調査区全体が水田として機能していた。

引用・参考文献

- 安藤一男1990、「淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用」：『東北地理』42、pp.73-88
- 池田研1999、「古墳時代の貝出土遺跡－崇禪寺遺跡を中心に－」：『大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.373-379
- 石井啓2006、「備前」：『瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編『江戸時代のやきもの－生産と流通－』（記念講演会・シンポジウム資料集） pp.175-198
- 市原 実1993、『大阪層群』創元社
- 大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九
- 1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1999、『崇禪寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 2001a、「阿倍寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.51-60
- 2001b、「崇禪寺遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.103-111
- 2002、『大阪城跡』Ⅵ
- 2008、『岡田4丁目所在遺跡発掘調査報告』
- 大阪府教育委員会・大阪市文化財協会1991、「中田邸建替えに伴う崇禪寺遺跡発掘調査(SZ89-13)略報」：『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.121-126
- 1996、「新大阪森ビル建設に伴う発掘調査(MH94-2)」：『平成6年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.153-165
- 2001、「丸紅株式会社による建設工事に伴う宮原遺跡B地点発掘調査(MH99-3)」：『平成11年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-5
- 2003a、「崇禪寺遺跡発掘調査(SZ01-4)報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61-65
- 2004、「崇禪寺遺跡発掘調査(SZ02-1)報告書」：『平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.51-53
- 2008a、「宮原遺跡発掘調査(MH06-1)報告書」：『平成18年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73-76
- 2008b、「宮原遺跡における発掘調査(MH06-2)報告書」：『平成20年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.297-303
- 2008c、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA06-1)報告書」：『平成20年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.307-313
- 2009、「西淡路1丁目所在遺跡B地点発掘調査(WA07-1)報告書」：『平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.305-316
- 大阪府教育委員会1982、『崇禪寺遺跡発掘調査概要』Ⅰ
- 2003、『崇禪寺遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2002-4）
- 大阪府文化財センター2006、『大阪城址』Ⅲ

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』青木書店

川崎地質株式会社1994、『玉櫛遺跡の花粉、プラント・オーバー分析』：『池田西遺跡発掘調査概要』Ⅰ 大阪府教育委員会、pp.1-28

1995、『東京良遺跡における花粉・珪藻分析』：『東京良遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第92輯）大阪府埋蔵文化財協会、pp.53-62

京都府教育委員会1976、『長岡宮跡昭和50年度発掘調査概要』：『埋蔵文化財発掘調査概報』1976、pp.1-35

建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書（大阪平野）』

小杉正人1988、『珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用』：『第四紀研究』27、pp.10-20

小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社

堺市教育委員会1993、『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告-堺市宿院町西1丁SKT346地点-』：『堺市文化財調査概要報告』第38冊、pp.1-31

櫻井久之1999、『崇禪寺遺跡の性格に関する予察』：『崇禪寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会、pp.29-32

櫻井成廣1970、『豊臣秀吉の居城』大阪城編 日本城郭資料館出版会

佐藤隆1996、『中世後期の陶磁器・土器について』：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会、pp.81-92

新修大阪市史編纂委員会1988『新修大阪市史』第1巻 大阪市

杉本厚典1999a、『崇禪寺遺跡の古墳時代初頭の土器様式』：『大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.365-372

1999b、『崇禪寺遺跡の出土土器の特徴と編年』：『崇禪寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会、pp.17-28
積山 洋1994、『上町台地の北と南-難波地域における古墳時代の集落変遷-』：『大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.173-191

趙 哲済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ 大阪市文化財協会、pp.41-44

2005、『河内平野の古地理変遷』：『平野区誌』平野区誌刊行委員会、p.24

中村純1974、『イネ科花粉について、とくにイネを中心として』：『第四紀研究』13、pp.187-197

中村博司1995、『金箔瓦論考』：『織豊城郭』第2号 織豊城郭研究会、pp.99-130

西成郡役所1962、『西成郡史』名著出版

野高宏之2008、『解題』：『大阪市史編纂所編『大阪市史料』第七十輯 大阪市史料調査会、pp.179-189

服部昌之1988、『古代における景観構成とその変化』：『新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻 大阪市、pp.43-89

林田精郎・三田村宗樹・中川康一1987、『地盤沈下累積変動量のブロックダイアグラム化の試み』：『情報地質』12 情報地質研究会、pp.177-185

平凡社地方資料センター編1986、『大阪府の地名』Ⅰ（日本歴史地名大系28巻）平凡社

宮本佐知子・寺井謙2003、『大阪市内出土の金箔瓦』：『大阪城跡』Ⅶ 大阪市文化財協会、pp.339-366

向日市文化資料館1992、『洛外の世界』

向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会1993、『まとも』：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集、pp.87-95

森島康雄1992、『畿内産瓦器の併行関係と年代』：『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会、pp.113-117

渡辺正巳1995、『40・珪藻分析方法』：『考古学ライブラリー』65考古資料分析方法、ニュー・サイエンス社、pp.84-85

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

か	瓦器	8,11,14,19,22,30
	瓦質土器	11,14,22,24,26,29,30
	花粉	3,15,31,32,33,34,49,50
	瓦	11,14,19,22,24,25,26,27, 28,51,52,57,58,59
	雁振り瓦	25,51,57,59
き	金箔押し瓦	25,26,27,28,51,52,57,58
け	珪藻	3,15,32,43,49,50
	畦畔	15,18,19,49,50,56,59
こ	黒色土器	14
	古墳時代中期	7,22,56
し	植物珪酸体	3,15,31,32,41,49,50
す	水田	11,15,21,28,31,33,49,57, 59
	須恵器	11,14,19,22,27,29,30
	鑑溝	11,20,29
せ	青花	11,22,26
	青磁	14,22,30
	瀬戸美濃焼	11,14,22
た	溜池	20,28,57,58,59
ち	中世後期	10,11,15,19,27,30,57,59
	中世前期	8,19,30,56,59
て	天目碗	30
と	東播系	14,19,30
	徳川期	1,10,26,57,58,59

	土曜	15,19,59
	豊臣期	28
	豊臣後期	26
な	奈良時代	8,56
	軟質施釉陶器	11
は	白磁	14,22,28,30
	土師器	11,14,19,22,30
	土師質土器	11,22,26
ひ	肥前磁器	11,26
	肥前陶器	11,26
	備前焼	24,26,27,28
み	溝	10,11,15,56
や	弥生時代後期末	6
り	緑釉陶器	14,30
る	増堀	28

〈地名・遺跡名・年号など〉

お	大坂城	51,52
こ	興隆寺	51,52
	御霊屋敷	51
さ	堺環濠都市遺跡	51
そ	崇禪寺	8,10,52,53,56,57,58,59
	崇禪寺遺跡	5,6,7,10,53,56,57
に	西浜路1丁目所在遺跡	1,5,7,8,51,53,56
ほ	豊国神社	51
み	宮原遺跡	5,6,7,8,53,56

**Archaeological Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Hinode Apartmenthouse complex

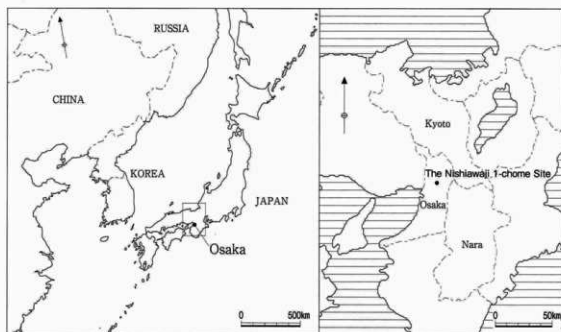
March 2010

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

- SD: Ditch
- SE: Well
- SG: Irrigation pond
- SK: Pit
- SR: Paddy field baulk



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Background and Progress of Reserch to Publication of report	1
S.1 Background and Methods of Reserch	1
1) Background of Reserch	1
2) Methods of Reserch	1
S.2 Progress of Reserch and Report making	3
1) Progress of Reserch	3
2) Progress of Report making	3
Chapter II Geographical and Historical Surroungings of the Site	5
S.1 Geographical Surroungings	5
S.2 Historical Surroungings and Preceding Investigation	6
Chapter III Investigation Results	11
S.1 Stratigraphy	11
S.2 Features and Remains	15
1) Features on stratum 5A	15
2) Features on stratum 4	15
3) Features of stratum 3B	19
4) Features and Remains of stratum 2	20
5) Remains from each stratum	29
Chapter IV Natural scientific analysis	31
S.1 Purpose and Samples of analysis	31
1) Purpose of anlysis	31
2) Samples of anlysis	31
S.2 Pollen analysis	32
1) Analysis methods	32
2) Analysis results	33
S.3 Plant opal analysis	41
1) Analysis methods	41
2) Analysis results	41
S.4 Diatom analysis	43
1) Analysis methods	43
2) Analysis results	43
S.5 Consideration	49
1) Sedimentation time of samples	49

2) About cultivation stratum	49
3) The transformational cause of stratum 5A	50
4) Paleo-environment	50
Chapter V Discussion of features and artifacts	51
S.1 Consideration of the roof tile with gold leaf unearthed in Nishiawaji 1-chome site	51
1) Outline of the roof tile with gold leaf unearthed in Osaka city	51
2) Significance of the roof tile with gold leaf unearthed in Nishiawaji 1-chome site	51
S.2 Dynamic statistics of the Nishiawaji 1-chome site and surrounding sites ..	53
1) Outline of the ancient topography	53
2) Dynamic statics of each period	53
Chapter VI Conclusion	59
1) Before the Former Medieval periods	59
2) Later Medieval periods	59
3) Toyotomi periods	59
4) After Tokugawa periods	59
References and Bibliography	61
Index	
English Contents	
Extract	

報告書抄録

ふりがな	にしあわじいっちょうめしよざいいせきはつくちようさほうこく							
書名	西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告							
編著者名	市川 創・宮本佐知子							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2010年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
にしあわじいっちょうめ 西淡路1丁目 所在遺跡	あわさし せいとうめく 大阪市東淀川区 西淡路1丁目	27121	-	34° 44′ 01″	135° 30′ 29″	20081224 ～ 20090304	540㎡	市営住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
西淡路1丁目 所在遺跡	田畑	中世後期		畦畔		瓦質土器・陶磁器・瓦		
		豊臣期		流路		陶磁器・金箔押し瓦		
		徳川期		溜池・井戸・鑿溝		陶磁器		
要 約	本書は、東淀川区において行った西淡路1丁目所在遺跡の発掘調査の成果を報告するものである。 調査では中世後期以降、近代まで累積する作土層を検出したほか、護岸を施された徳川期の溜池などを検出した。これらは淀川の水流に育まれた当地における土地利用を如実に示すものとして注目される。 また、溜池は当初は河川の一部であったと目され、その下部の水成層からは豊臣期までの遺物とともに二次的に被熱した金箔押し瓦が出土した。本来の遺構や地層からは遊離した資料とはいえ、淀川以北では大阪市内初の出土例であり、豊臣期大坂のあり方を考える上で重要な資料である。							

原 色 図 版

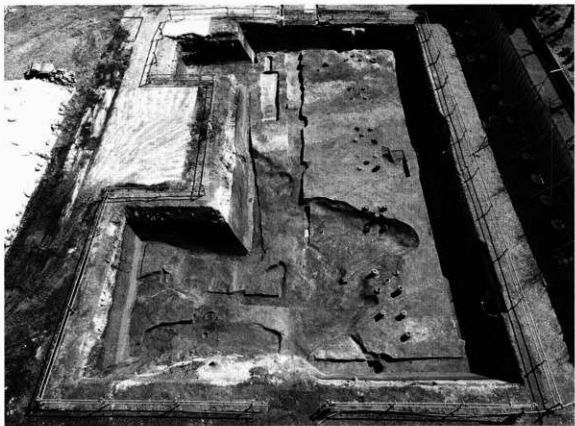


調査地遠景
(北東から)



金箔押し瓦10(実物の75%)

圖 版



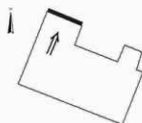
調査区全景(第5B層上面、北西から)



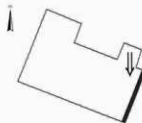
調査区南壁(西北西から)



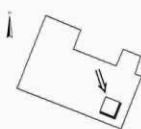
調査区北壁
(南西から)



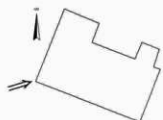
調査区東壁
(北から)



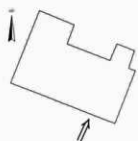
深掘り地層断面
(北西から)



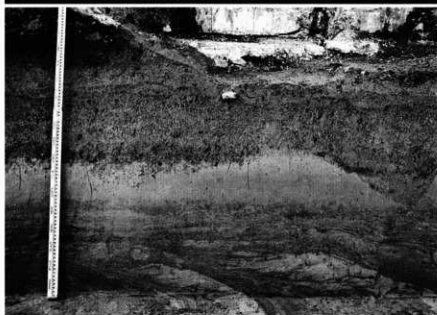
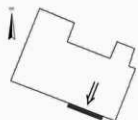
第4層上面全景
(南西から)



SR401~406
(南西から)

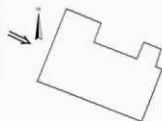


SR405断面
(北東北から)

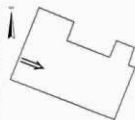




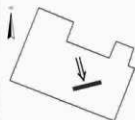
第2層上面全景
(北西から)



鋤溝群検出状況
(北西から)



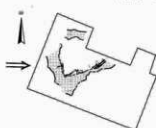
地層観察畦断面
(北西北から)



SG201断面
(北北東から)

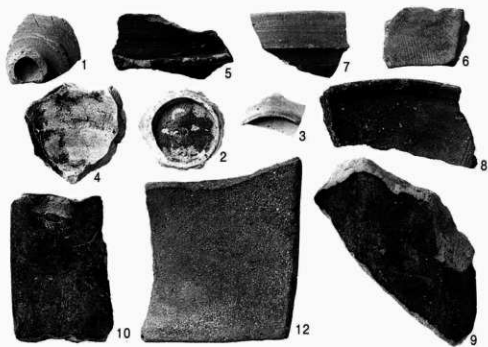


護岸遺構
(西から)

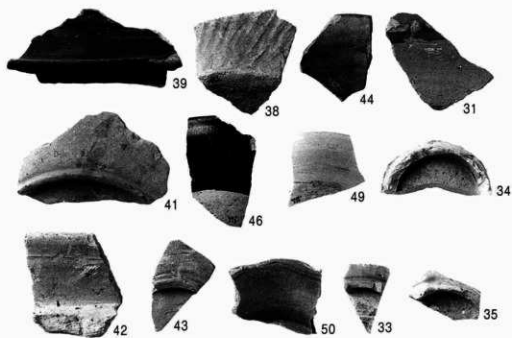


護岸遺構
(北西から)

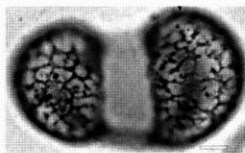




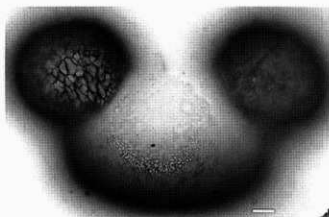
SG201第1次水成層出土遺物



各層出土遺物



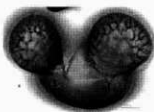
マキ属



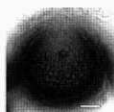
モミ属



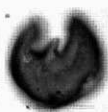
ツガ属



マツ属(複維管束亜属)



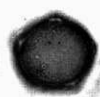
コウヤマキ属



スギ属



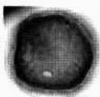
サワグルミ属
-クルミ属



クマシダ属
-アサダ属



ブナ属



ニレ属-
ケヤキ属



アカガシ亜属



コナラ亜属



ムクノキ属-
エノキ属



トチノキ属



イボタノキ属型



ガマ属



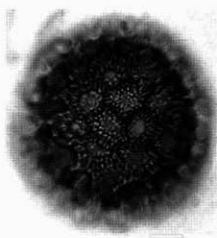
オモダカ属



イネ科
(40ミクロン
未満)



マメ科



ウナギツカミ属-サナエタテ属



モチノキ属



ヨモギ属

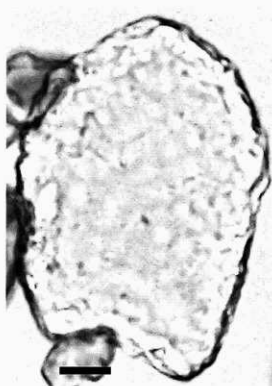


シノブ属

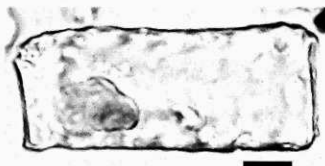


イノモトソウ科

スケールバーはすべて0.01mm



ヨシ属



キビ族型



ススキ属型



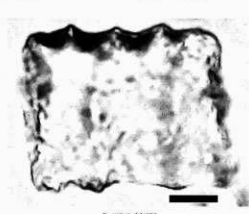
ススキ属型



ウシクサ族A



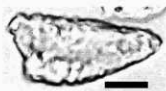
メダケ節型



ネザサ節型



ミヤコザサ節型

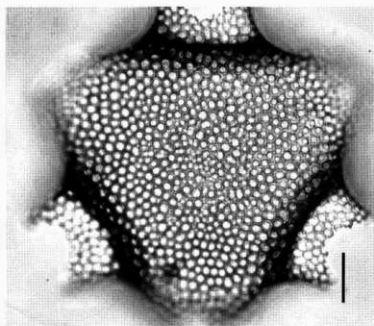


表皮毛起源

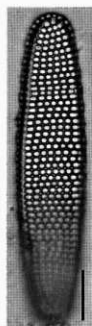


樹木(その他)

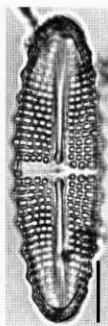
スケールバーはすべて0.01mm



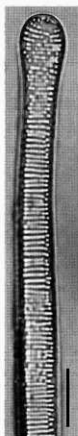
Hydrosera triquetra



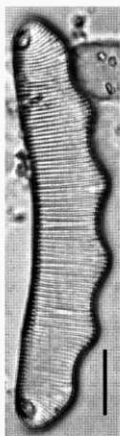
Achnanthes brevipes



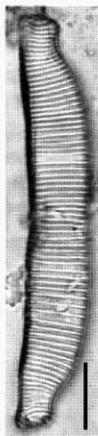
Achnanthes brevipes



Eunotia biareofera



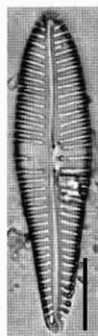
Eunotia monodon



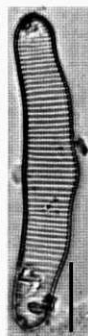
Eunotia praerupta
var. bidens



Gomphonema acuminatum



Gomphonema gracile



Eunotia pectinalis
var. undulata

スケールバーはすべて0.01mm



Eunotia pectinalis
var. undulata



Melosira granulata

大阪市東淀川区 西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-026-6

2010年3月19日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

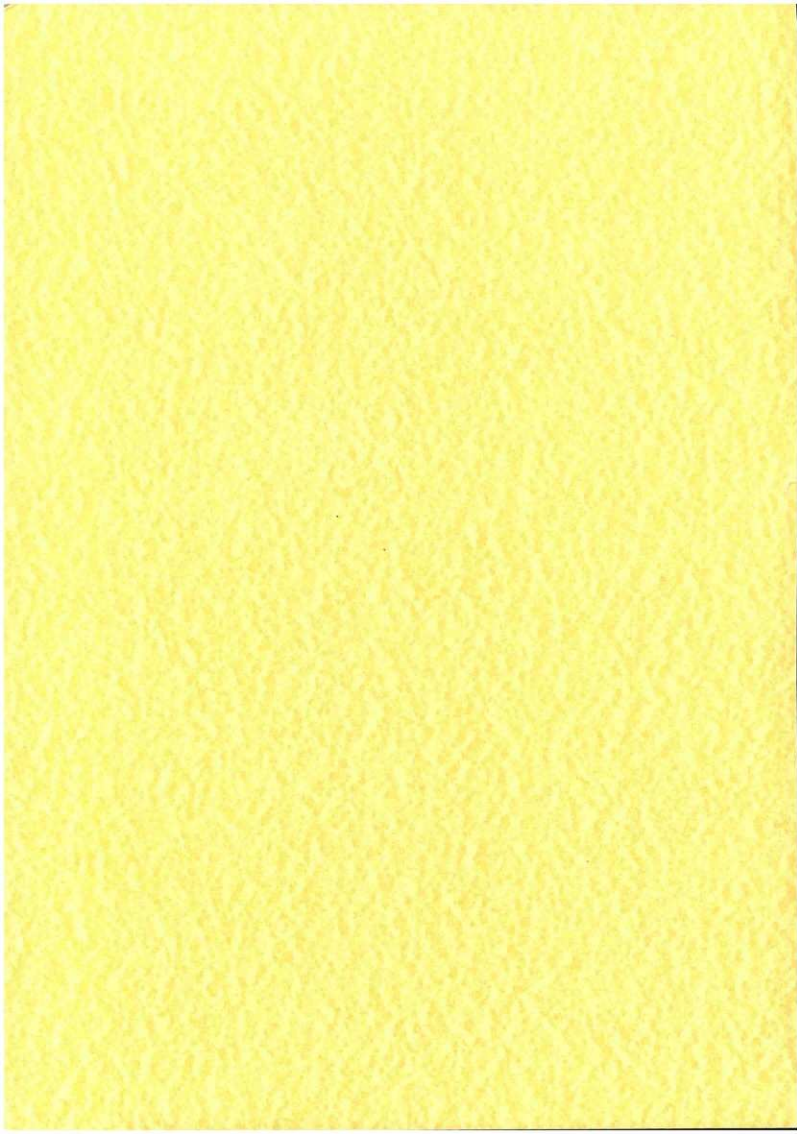
〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Hinode Apartmenthouse complex

March 2010

Osaka City Cultural Properties Association



**Archaeological Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Hinode Apartmenthouse complex

March 2010

Osaka City Cultural Properties Association